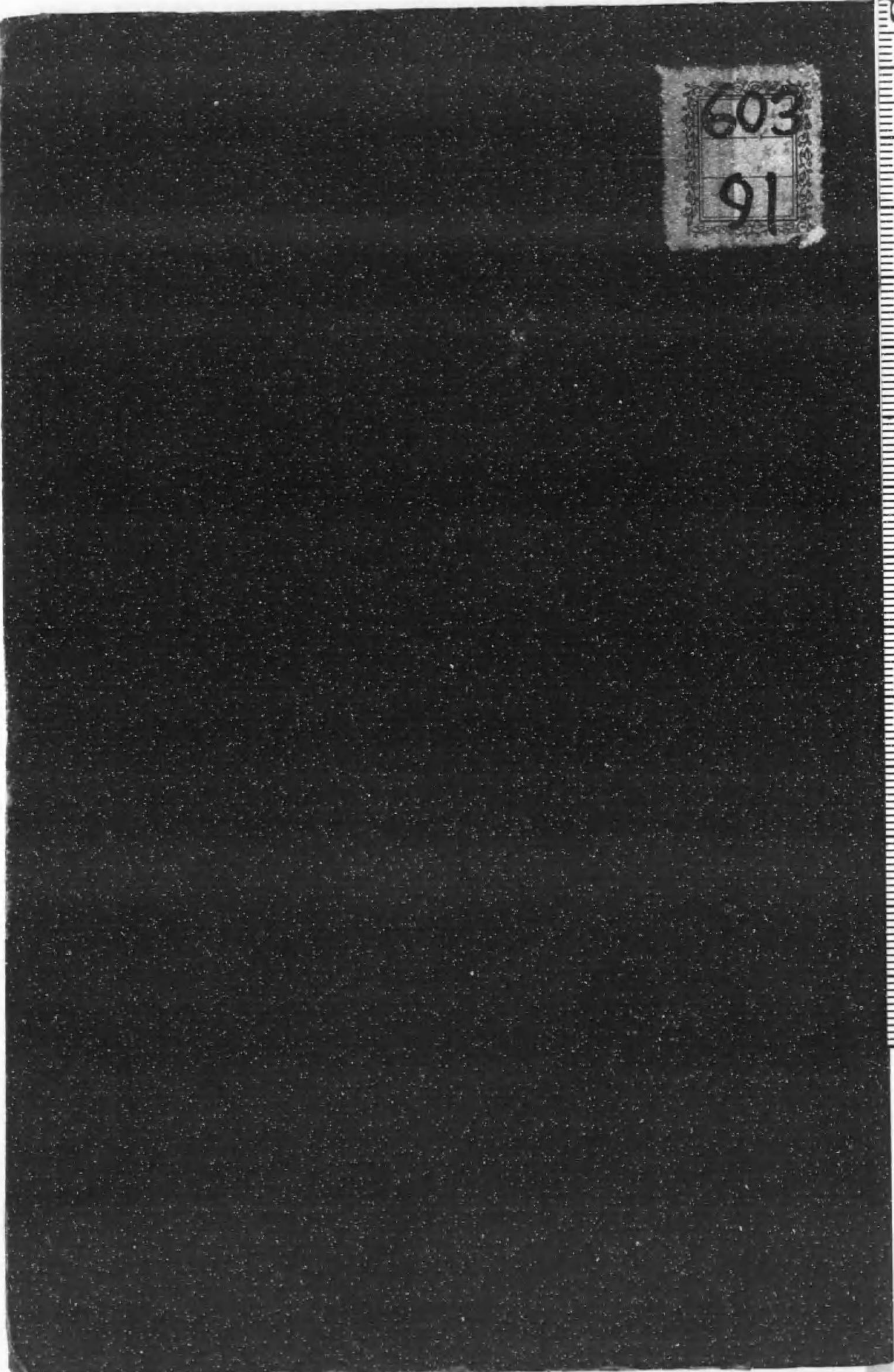


始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

603
91



特220
158

貞操 の 洗濯場

島洋之助
著

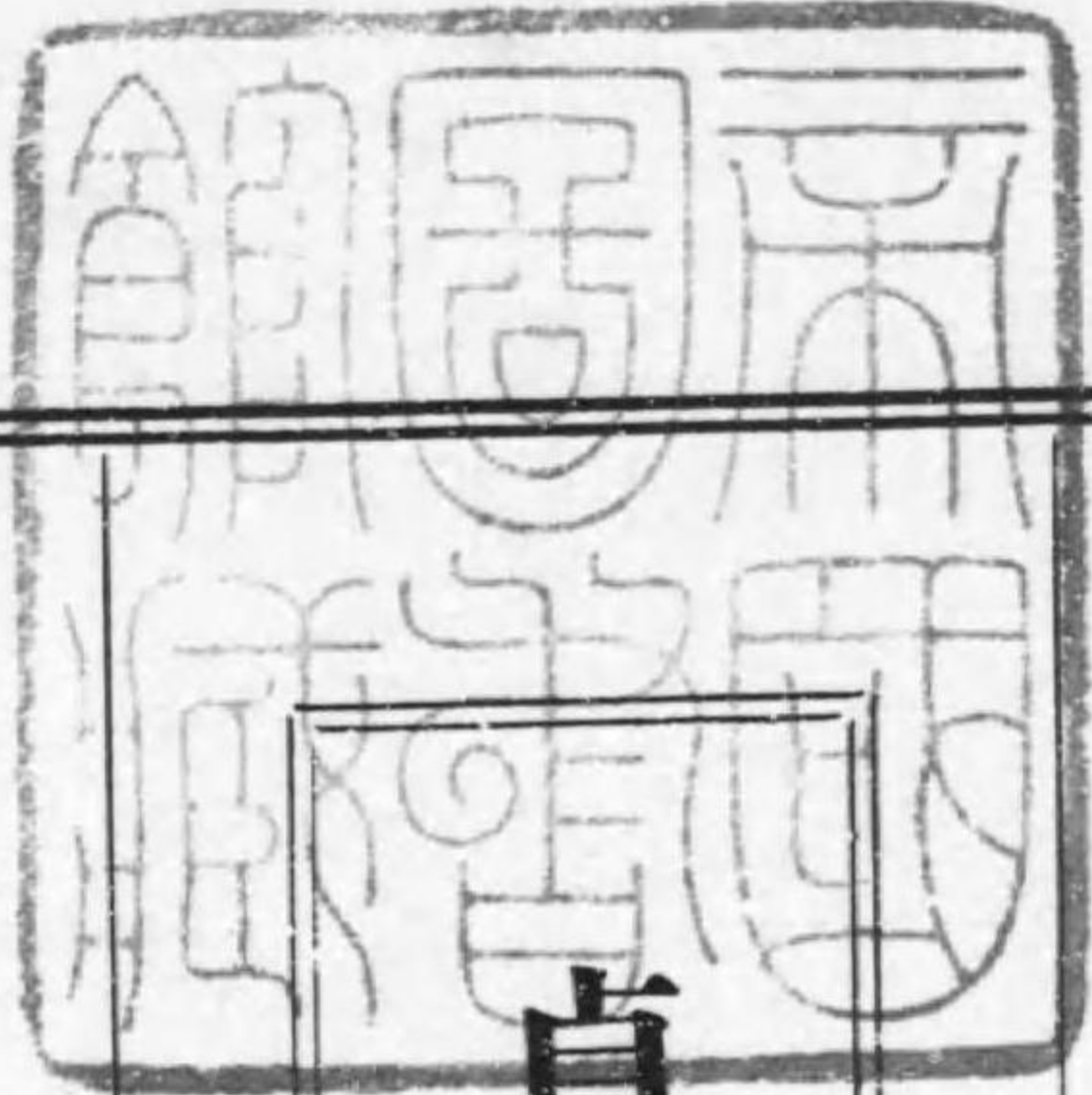
3 401



島洋之助著

貞操の洗濯場

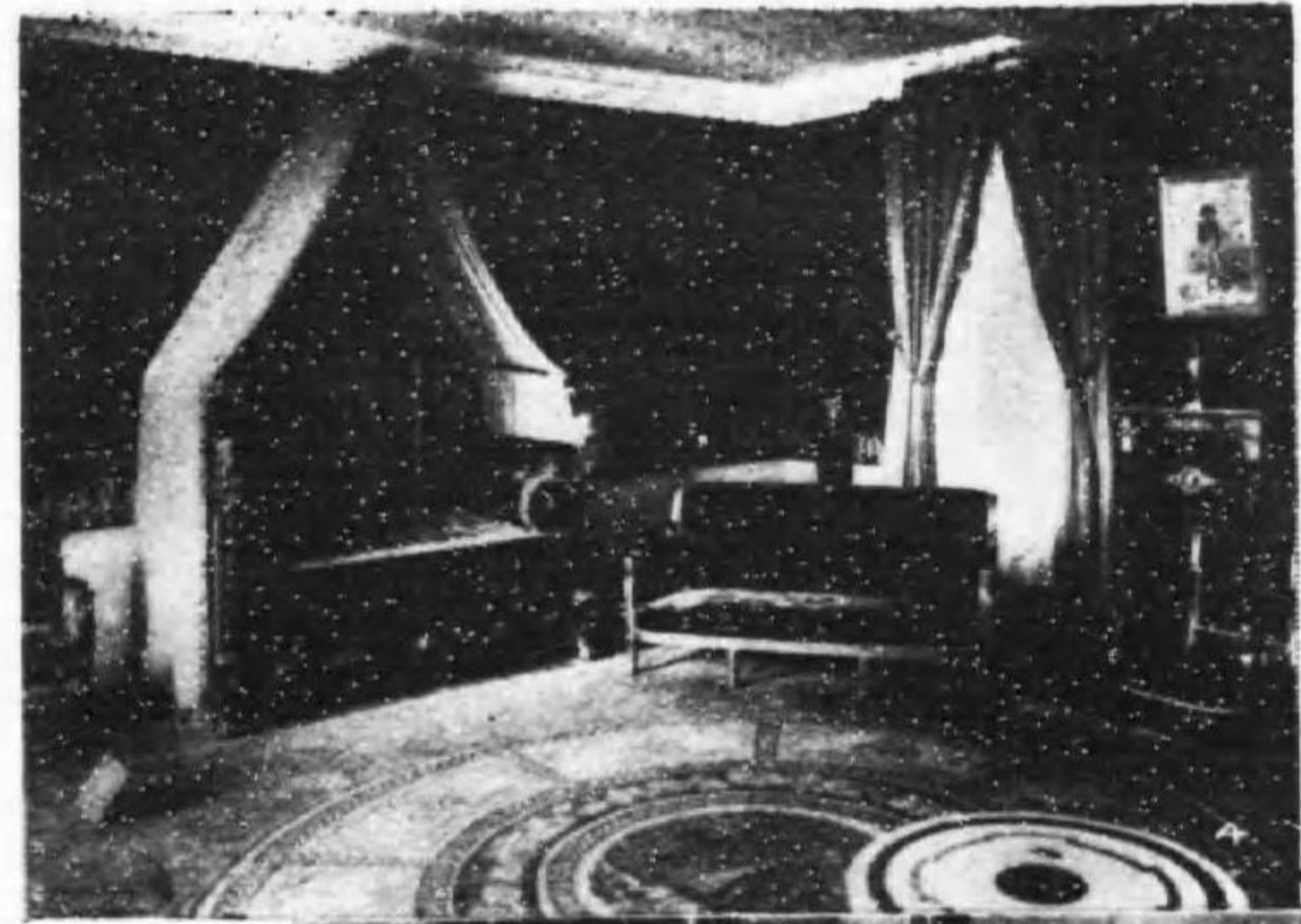
東京 赤爐閣書房



To remember you of
 the Paris - Rome Journey
 Man ishemava kustaram
 Berlin 2. 11. 1928
 J.S. Brown
 1505 Houston
 Rose, Tulpen, Nelken
 alle Blumen welche
 Stahl und Eisen
 bricht
 für Erinnerung
 an meine glückliche
 verlebte Zeit
 in Berlin
 John V. McCoy
 New York City
 June 4

Adette
 Olympe
 rue Berry 18
 Paris
 Jim Andersen

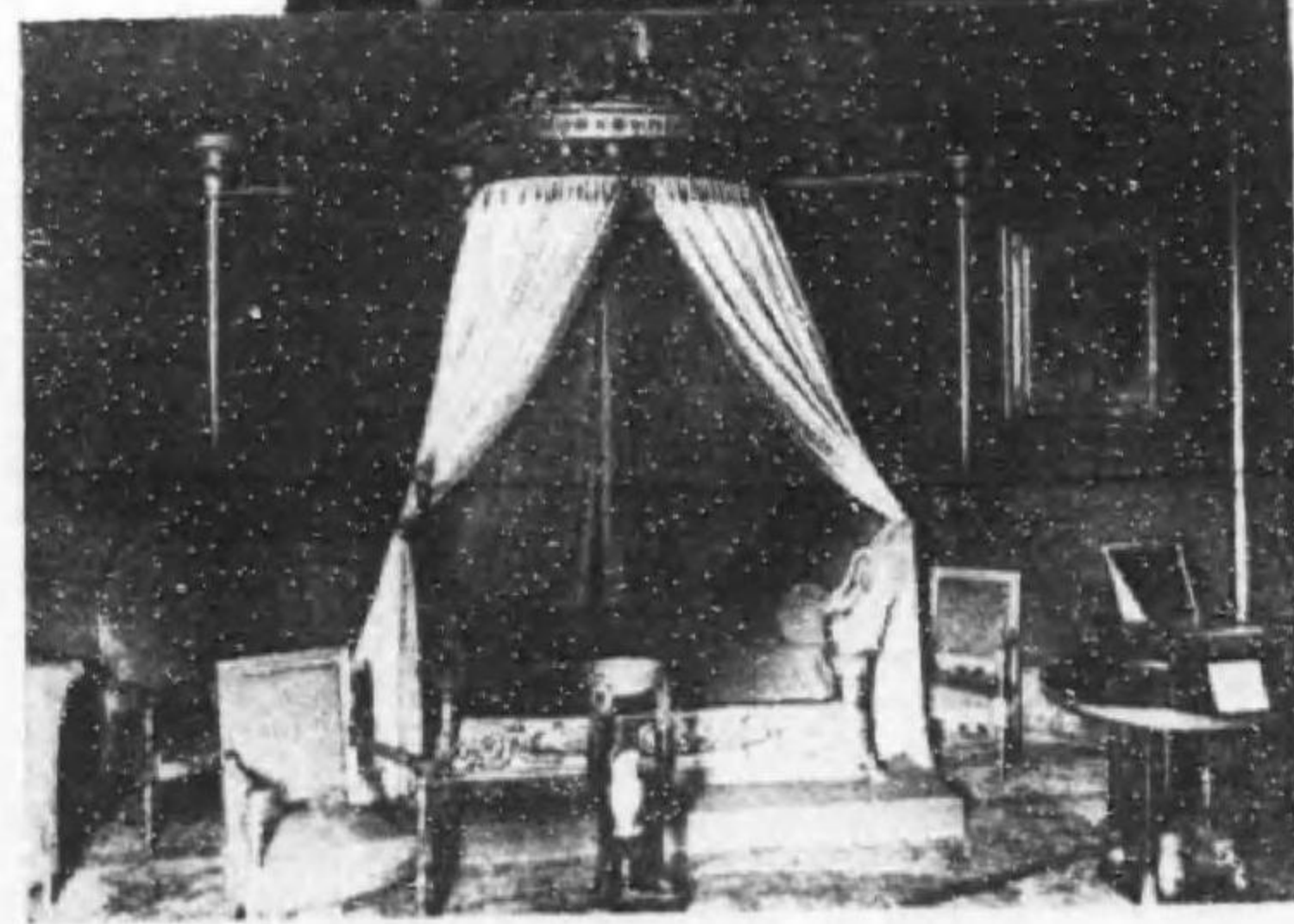
Mademoiselle
 Bal Cabain
 every night.
 29 juillet 1928
 From a woman of
 no importance,
 Panata Julandova.
 in rue de Jussieu, Germaine Pelon
 Fontenay aux Roses
 Seine alle
 Suzy Dupin
 Hotel Pratic
 Paris 18 -



ヴェルサイユル宮殿
ナポレオンの寢臺



ヴェルサイユル宮殿
浴室



ヴェルサイユル宮殿
チヨセフキンの寢臺



佛蘭西の併優



育紐加利米亞スーオウルーウ グンデルビのー界世

はし が き

土用波の後に、しばらくは名残りの濤がつやくやうに、今日は「名残りの濤」の時代である。歐洲大戦といふ大きい怒濤の後をうけて、世界は今「名残りの濤」に揺られてゐる。ジャズが、カフエーが、レビウーガー一口にいふ享樂主義が歐洲を風靡し、アメリカを襲ひ、さては日本までがその飛沫をあびて浮かれてゐる。

面白い時代相である。世界中の文明國人が衣を脱ぎ、足を宙にして、あらはな人間の姿を投げ出してゐるのである。これが見物でなくて何んであらう。島洋之助君は、この面白い時代相の研究にはるく、歐本行脚をこゝろみた特志人である。彼は何にをそこに觀て來たか、敢て自ら言ふ曰く、

脱衣の世界の姿——

文化の尖端を競ふ歐米の横顔——と。

彼は正に見るべきものを觀て來たのだ。

「貞操の洗濯場」は、藝術的エロティックの研究をもつて任ずる君が、滯歐米數ヶ年、その緻密なるミク罗斯コープと鋭利なるメスによつて解剖検査した事實の赤裸々な記録である。

即ち英、米、佛、伊、獨をはじめ、世界文明國の女の好色と淫蕩を縦横に論じ、カフェー、酒場、レビューが織り出す酒と光りとジャズの世界——歡樂境の交響樂——をとほして暗黒と陰慘と罪惡のモザイクを巧みに描寫し、大戰後の爛熟せる世界人肉市場に亂舞する情痴感覺を一目瞭然たらしめたのがこの書である。

この一部は曩きに「新青年」並に「朝日」誌上に發表して、多大の喝采を拍したるもの、所謂「名残りの濤」の時代にある毆米の實相を知らんとする人々、——且つ性慾問題、公娼問題に關心ある人々の好資料であると信じる。

千九百三十年三月

博文館編輯局にて

森 下 雨 村

序

A

これは、二十世紀の前半期に於て文化の尖銳を競ふ毆米諸國の素顔である。文明と云ふ光りと色と音の白粉で彩られた楯の裏面である。

劃世的世界大戰に依つて、剝けた白粉を、再びコンパクトを叩いて修理して行く文化の追従者の後姿の、なんとまあ汚く穢れたことよ。

摩天樓に、自動車に、其處に織り出される灼燦たる新時代の交響樂。甚處には常に巧妙なトリックと噓偽が一切を眩惑する。だが暗黒と醜猥を露にしたその裏街は、永遠に裸のまゝの眞實を示す。

私はその脱衣のまゝの世界の裏街を覗いて見た。つねに驚異と怪異を探ぐる獵奇者として。

B

亞米利加女は、傲慢で、輕薄で、實利的である。濃やかな情を持ち、而かも禮讓を捨てないの

は英吉利女である。

妖艶で、變態で、享樂を生命と信じてゐるらしいのが佛蘭西女、本能的に性の惱みから脱れ得ずしてもがくのが獨逸女である。

天性のヴァンプ型な凄艶さを持つ伊太利女、善良な娼婦として見へる露西亞女等等。だが、何れも——洗へば元に返る——貞操觀念を持つ彼女達である。

C

これは、その驚異すべき貞操の洗濯場を覗き、それを偽らずに盡いた一ペーントーに過ぎない私の貧しい暗黒街巡禮記である。

これに依つて世界の裏の現實を知り、いささかなりと考へて呉れる讀者があらば幸甚とする處である。

千九百三十年淺春

朝夕空に金鯱を仰ぐ名古屋の寓居にて

著者

貞操の洗濯場

目次

嬌漫あめりか女

海洋上の惡の華	四
金門公園の畫寫	九
蜂の家の神秘	三
失戀の鼻	七
夜半の魔窟	二五
闇の自動車	三三
果實園の女王	三七
夜行列車奇談	三九
手首の誘惑	四三
魔都市俄古	四八
コメデーの花形	五〇
キツスの切賣	五三

買ったニグロ少女	一五
からくり階段	一六
人妻を盗む	一六
撲られた伊達男	七一
日本語で叱られる	七四
近代淑女俱樂部	七七
謎を解く	八〇
ハドソン河畔の女盗	八四
私娼の請願巡査	八八
大陸を流れあるく女	九二
黒人娘氣質	九五
美人選拔競技	一〇一
花模様三人娘	一〇三
キヨトを慕ふ女	一〇七
船中奇譚	一一〇

She is Coloured, You know
ある外國視察者の手紙

E D C B A	一五
酒のない國	一六
特製痰唾燻肉	一〇
強盗と警官	一七
第二世物語 A	一四
B	一四
C	一五
D	一六
E	一五
情熱いぎりす女	一六
六日間の妻	一七
ピカデリー夜話	一七
壁に掛けた扇	一七

ハイドパークの妖婦……………一八〇
 カフエーカキシム……………一八三
 英國製杖娘……………一八七
 空を見て歩け……………一九一
 妙な署名……………一九四
 東倫敦の夜……………一九六

妖媚ふらんす女

世界觀樂郷巴里……………二〇四
 接吻の中毒……………二〇六
 美人風呂……………二〇九
 樂園の寢臺……………二一一
 シャンゼリゼーの夕……………二一四
 S老人のロマンス……………二一七
 モンマルトルの歡樂……………二二〇
 神よ忘れて下さい……………二二五
 セツクス座談會……………二二九
 美姫の正體……………二三五

變な繪葉書屋……………二三八
 美技……………二四一
 モンバルナス珍譚……………二四二
 日本へ歸れぬ話……………二四六
 G座の怪奇劇……………二四九
 オペラデ逢つた女……………二五六
 キヤバレー巡禮……………二五九
 要塞跡の赤い花……………二六三
 涙の財布……………二六四

好色どいつ女

女の伯林……………二七〇
 カフエーヅキクトリア……………二七二
 エルザは泣く……………二七六
 亭主の感謝……………二八三
 カフエーアウリカ……………二八五
 日本料理店の女客……………二九二
 エリカ物語……………二九四

好色獨逸女……………三〇三
 腋臭に咽ぶ……………三〇九
 文身の誘惑……………三二〇
 獨逸製蔭人形……………三二三
 茶飲み友達……………三三二
 臭い一馬克……………三三五
 頰の創痕……………三三七
 大業な武勇傳……………三三九
 破戸漢男娼……………三三一
 M教授の童貞……………三三九
 緑のカーテン……………三四三

競艶諸國女

膝枕奇談……………三五二
 女裝の美談……………三五五
 凄艶伊太利女……………三三八
 覗き眼鏡……………三六二
 ポンペーの壁畫……………三六五

西伯利亞餘聞

ヴェニス御難……………三六八
 ゼネバ湖畔の花……………三七二
 瑞西の映畫館……………三七九
 身代りの時計……………三八一
 踊り子の部屋……………三六六
 和蘭陀の少女……………三九九
 葡萄牙女氣質……………三九二
 列車ロマンス……………三九四
 西班牙女の話……………三九七
 モンテカルロ挿話……………三九九
 西伯利亞鐵道夜話……………四〇〇
 ワルソ一の街路女……………四〇二
 妖精オルガ……………四〇四
 莫斯科の酒場……………四〇八
 親切な女ガイド……………四二〇
 列車娼の話……………四二五



貞操の洗濯場

島洋之助著

次 日

美しくしい毒蛇	四三五
私の首が五萬ルーブル	四三五
美しきスラブ魂	四四四
ハルビンの夜	四五四

附 録

現代得戀術	四六七
ホールドアップに逢つた話	

魔都市俄古	四七一
眞晝中の遭難	四七四
チツプ物語	四七八
戀友邂逅奇譚	四九三
洗濯屋の親方	四九四
ダイヤのピン	四九九
二重意識者	五〇一
終り	

女かりめあ慢嬌

どう美人だらう、妾は、
 綺麗だらう——、この脚、
 いくら惚々して付いて来たつて、
 へん、唾も引かけてやるものか、
 と、濟した顔。だがその時チャリンと金貨
 の音させたら、
 「幾何もつてよ」
 と直ぐ寄り添つて来る、
 傲慢だが現金なのが亞米利加女である。

(あめりか)
 (いざりす)
 (ふらんす)
 (べるぎい)
 (おらんだ)
 (いたりあ)
 (どいつ)
 (あしあ)

かがやきと狂騒曲に交なす灯の海を羽ひろげゆく孔雀なるかも
 テームスの河岸の夜霧に濡れてさくさみせん草の哀しかりける
 マロニエの樹影の間に浮びでる鶯かとばかり白きその脚
 ほのぼのと春あけぼの、窓にみし忽忘草の空いろの瞳
 春風やそらをのぞかに風車すみれかさして泣く少女かも
 ヴキスピヤスの山の焔か戀の歌胡弓ならして身も焦すなる
 菩提樹の黄葉ちるく泣きぬれて別れの接吻惜しむ小女よ
 白樺の林の月におざり出る妖しく青き水の精かも

—洋之助歌日記より—

海洋上の悪の華

静かな航海である。私達の××丸は今鏡のやうな太平洋上を快走してゐる。折柄晩春の柔かい日を浴びて、甲板上では、デツキゴルフにシヤフルボードに、或は輪投げにビンボンに、乗客は嬉々として遊び戯れてゐる。日本では謹厳そのもの、やうに云はれてゐるF博士も、婦人問題で有名なK女史も、髯の白いカソリックの老教師も、お轉婆盛りの亞米利加乙女、若い日本留學生、實業視察のM市長さん、中學校長のT先生、北京大學の若い教授のR氏——みんな小供のやうに遊び戯れてゐる。

全く、船内生活は、各國民の寄り合ひ世帯で、宛然世界の縮圖を現出してゐると云つていい。だがこの縮圖の小世界では、矢筈しい國際上の條約もなければ外交問題もなく、各國民は、只晝は甲板で夜は社交室で、其の日其の日を愉快に、遊び暮せばいいのである。で、船内で催される運動會、演藝會、假裝會は各國民の粹を競ふ譯だが、眞にコスモポリタンな娛樂場とても云はれる。

乗船した當座の二三日は船に弱い人達は、船室に籠つて、食事迄、ボーイを煩したもののだが、馴れてしまうと、纖弱い婦人迄が、船酔いなどけろりと忘れて、甲板の遊戯に夢中になると云ふ始末。

さうした乗客の遊びは、けるを他所に、毎日その甲板を、ぶらり〜と散歩してゐる二人の若い亞米利加婦人があつた。二人共もう二十五六同じ淡紅色の帽子的下から斷髪したブロードの髪を覗かせて、その兩耳にはダイヤらしい、可愛い耳環をひらつかせ乍ら、短かいスカートの下の均整のとれた脚を大股にコッ／＼と歩いて行く。

「一體、彼女等は何者でせう。」
デツキゴルフに疲れた私は、側の長椅子に寝ながら、雑誌を読み耽つてゐるN貿易會社員のHさんに問ふた。

「彼奴ですか、勿論、只者ぢやありませんよ。何處から乗つたでせう。神戸かな。」
Hさんも少し興味を持つたらしく、向ふへ行く二人の後姿に眼をやり乍ら云つた。

「横濱では見受けなかつたやうですが。それにしても、彼女達は、甲板の遊戯など少しもやら

ない處を見ると、興味を持たないやうですね。」

「その代り、あゝして遊んでゐるやうで、稼いでゐるのだから損ぢやありませんよ。夜になつて御覽なさい。社交室では彼奴等は、自分の世界のやうに、はしやぎますから。」

紐育の支店詰でも十数年の米國生活をつゞけてゐるHさんは、斯う云つた方面にはかなり經驗を踏んでゐるらしく、上海、香港、長崎、神戸、横濱等へ出稼ぐ米國女の話しを始めた。

「彼奴等は、相當出稼先で金を握つたのでせう。久々で故郷へ墓參——なんてシヤレタ處でなくとも、まあ両親が兄弟に逢ひに歸つて行くのでせうが、船の中だつて無價値に日をくらしたりなんかしませんよ。其處がヤンキーガールですね。幾何ですつて、さあ一晚五十弗位は云ふでせう。何しろ船中であるし發見されたら矢筈しいのですからね。」

Hさんの話に興味をひかされた私は、其の晩々餐の卓を離れると社交室に隣つたダンスホールに同室のS君と二人で、ダンスの始まるのを待つた。やがて、賑やかなジャズバンドの吹奏が始まると、ぞろ／＼と人々が集まつて來た。さうして私達も何時とは知らず、その踊りの中に吸ひ込まれて行つた。

「ホラ、來た。素晴らしい恰好をしてゐますぜ。」

隣りで、丈の高い獨逸系らしい婦人と踊つてゐたS君が肩越しに後から私に私語いた。なるほど、晝と違つて更に念入りの化粧した顔は美しい。眼の縁の青黛の凄さ、思切つてつけた口紅の毒々しさ——、孔雀の模様を染め出した派手なハッピーコートを着けた姿は、全く素晴らしい

「一度踊つて見やうぢやありませんか、踊つてゐる間に一つ當つて見るかな。」
大學を出て、東京のM會社に勤めること七年、拔擢されて紐育支店詰になつてゆくS君は、學生時代から、ダンスホールを荒らしてゐる斯道の達人、流行の摩登ボーイ型の血の多い青年である。だから、ダンスに關しての斯うした經驗は充分會得してゐるらしい。

三度目の音楽が始まつた。S君は靜かに二人の女に近づくと、慇懃に申込んだ。
「オーライ。」

丈の高い方の女は、すらりと身を起すと小柄なS君の手をとつた。一わたり、賑やかなジャズ、華かな亂舞——踊り終つたS君は女を椅子に歸すと愉快さうに私の席へ歸つて來た。

「素的、素的、想像通り、彼奴等はホノルルから乗つた娼婦ですよ。少し踊つたら酒場へ行か

ないかと云ひましたつけ。よろしかつたら一緒に行きませんか。』

S君は、不良らしい卑しい笑ひを其の瞳に溢よはせ乍ら誘つた。

次の踊りでS君が其の事を告げると踊りの終らぬ裡を、すり抜けて私達は、舷側の酒場へ、暗い甲板を腕を組み乍ら歩いて行つた。

酒場では、四五人の日本人達が將棋を戦はしてゐると、入口の隅でポーカーに餘念ない三人の西洋人がゐるばかり、閑散なものだつた。それに、勝負に熱中してゐる人達は別に私達を注意もしないので、結局私達はそれをいゝ事にして、テーブルに就くと酒を命じた。女達はよく飲んだ。

最初彼女等は、布哇の女學校を出た者で、今度、本國の加州大學に入學するために行くのだと誠しやかに云つてゐたが、その内、

『僕達は今晚君達の船室に遊びに行きたいな——。遊びに行つてもいい。』

とS君の突込んだ言葉にうつかり、

「エ、いゝは、だが All night は嫌だ。」

で、すつかり箔をはがしてしまつた。結局

「One hour で二十弗——馬鹿にするない、もう一週間もしたら、幾何でも遊べるわ。」

S君と私は、勝手に日本語で憤慨してとうく彼女等を船室迄送ることにして外へ出た。

『へエ、そいつは儲けものでしたね。ホイスキー三杯で、キッス一回か、そいつは安い。僕の方の女は未だそれ迄酔ばらつてゐなかつたな。』

自分達の部屋に歸つた時S君斯う云つて、さも羨しさうな顔をした。

金門公園の畫鳶

朱塗の高欄、風雅な茶室、神さびた鳥居に、なつかしい日本情緒を味はつた私達は、藤蔓で編んだ反り橋を渡つて日本茶園を出た。其處は廣い芝原で、人々は、折柄の温かい日を浴びて散々伍々と往來してゐる。向ふの小高い丘に建つ白亜の建物が博物館でその横の石造の音楽堂では、賑やかな音楽につれて、一人の唱女が甲高いソプラノで唄つてゐる。ブラタンの葉蔭の椅子に日をよけて人々は恍惚とそれを聞入つてゐる。水族館の珍らしい魚類や海産物を見、入口の噴水池に

愛嬌を添へる海豹の曲藝にかなりな時間を費して、東方のグラランドの方へ、松原の道を行く。

ふと、往來の人達は一せいに足を止めた。男達は帽子を取つて緊張した。自動車は止まる。馬上の警官は、舉手の禮をしてゐる。一體何事が起つたか？

「チエ、僕達も帽子をとらうよ。」

W君は斯う吐き出すやうに云つて帽子をとつた。音楽堂で今吹奏してゐるのが米國々歌だからと云ふのである。なるほど定まつた統治者を持たないこの國では、國家と云ふ觀念を國旗と國歌に依つて象徴してゐるのだ。形式的ではあるが、何事にも自由を謳歌し、世界人種の寄り合ひ世帯である米國民としては感心だと思ひ乍ら行くと、次の瞬間、その感激は目茶目茶に破壊されてしまつた。

其處の草叢の蔭に抱き合つて横たはる幾組かの男女、或は空に向つてダンスをしてゐる可愛いらしいエナメル靴、或は土にすりつけられた紅い帽子——濡れ紙を叩くやうなキツスの音。

りやう／＼たる彼等の國歌はいとも嚴肅に響いてゐる。なんと云ふ不謹慎さだ。否、なんと云ふ矛盾だ。

「だが、あゝしてゐて、パンツの前ボタン一つでも外してゐたのを發見されたら、直ぐ監獄行きだからね。だがそんな者を咎める不粹な巡查もゐまいよ。」

W君は別に珍しいと思つた顔もせず云つた。私達は間もなく、其處を抜けてグラウンドに出た

「もしもし、一寸。」

ふりむくと眼の丸い愛くるしい十八九の少女だ。頬を思ひ切り赤くした顔だ。

「何處かこの近くに、飲物のスタンドはないこと。」

小猫のやうな甘えた語調だ。

「存じませぬね。お嬢さん、向ふの池の邊に在るでせう。」

W君は、無難作に答へた。

「さう。貴方たち、自動車を何處に置いてゐるの。」

にたつと媚笑する瞳、魅惑的な料。

「僕達、今日時間がありませんよ。又の機會にね。」

W君は斯う云つて、尙も不思議さうに見てゐる。私の肩を押すやうにして歩き出した。

「ハ……、公園稼ぎの晝鳥さ。自分達の自動車に乗せて、進行中に目的を遂行する近頃新車の
 ガールさ。さあ、四五弗位だらう。然し、うっかりすると、彼奴等の宿へ引張つて行かれて、強
 迫されることがあるから危険だよ。」
 W君は喰へた葉巻をほんと道傍の草へ投げると、大きく肩をゆすぶつて笑つた。

蜂の家

金門公園を南に出ると小高い丘を二つ三つ立派な兵營の横を抜けて海岸に出る。桑港の海水浴
 場サンフランシスコ、ビーチでクリーハウスと云ふ處である。

その海岸一體飲食店、カフェー、射的、球ころがし、メリー、ゴラウンド。飛行機型の箱を廻
 轉機に依つて大空を飛ばしてゐる飛行館、抜け道の分らぬ迷路、天井と床に電氣を仕掛けて自動
 車を走らす電氣自動車館など流石米國式の大掛りである。水面を行く水鳥を、實彈で撃たせる店が
 ある。大きな爆音と共に銃口から青い火を發する。だが、其の前を行く人達は平氣で歩いてゐる。
 大きな時計型の椽のついた圓盤の數字に思ひ／＼に金を賭けて、ぐる／＼と廻る、針の靜止した處

を當りとして懸賞の品を受け取る者、單純なものになると、丸木の上に五寸釘を立て、其處に置か
 れた金槌で三回で打ち込んだら、賞品を呉れるとか、ベースボールの球を四五回彼方の板の標的
 に投げると云つたやうなものがある。懸賞の景品、金糸模様の美しい支那服とか、金紗のハッ
 ビーコートなどが燦爛と輝いて、人々の瞳を引く。

ピラミット型をした三角形の建物で正面の柱も壁も青と赤のペンキでベタ／＼と花に蜂の模様
 で塗られた小屋がある。看板に「蜂の家」とある。コミックオペラの類だらうと五十仙を奮發し
 て這入る。淺黄の幕を捲くつて薄暗い場内に這入ると、二筋になつた幅三尺足らずの橋がある。
 その橋が前後に揺れてゐて兩方の欄に身を支え乍ら歩んで行つたが、なか／＼前に進めない。妙な
 「見世物に」這入つてしまつたと軽い悔悟をしたが今更後へ引返す譯にもいかない。後から／＼
 と観客が這入つて來るのだから。

やつとの思ひで橋を渡ると、今度は狭い入口一杯に、大きな石臼が上から吊り下けてあつて、
 そいつがぐる／＼と、嫌な音を立てて廻つてゐる。勇氣を出してそれを押すと、これは又、何ん
 とした事か、ゴム風船で出來た石臼だつた。次へ二三歩、進んだと思ふと、バタ／＼、バタ／＼

と床が急に鳴り出した。足を止めると、音が止む、又踏み出すと、弾かれるやうにバタ／＼とやり出す。其處を過ぎると、どつと床下から、急に吹いて来た風に帽子は空に舞ふ上衣はめくられる。周章で乍ら次へ進むと、梯子がある、ゴムの棧だから、踏むとぐにやりとする。辛ふじて下りて、刺のある鐵網の柵を越す。之れも見た處さも鐵線のやうだが、やはりゴムで、巧に作つたものだ。門の扉があくと、さつと又してもヒドイ風だ。やれ／＼と命拾ひをした氣持ちで門内に這入る。中は廣い遊戯場でスケートや、メリー、ゴ、ラウンドなどがあつて賑かなパイプオルガンが盛に鳴り響いてゐた。其の廣場の横では澤山の人達が、上を仰ぎ乍らワ／＼と喚聲を擧げてゐる。近づいて見ると、最前、その上は丁度私達の通つて来たバタ／＼と床と、吹き上げの風の處だ。あの時は、驚ろきと周章とで氣もつかず、兩側は眞暗で何も見えなかつた。が、下では斯うして澤山の人達が見物してゐたのだな。

今丁度、帽子を空に吹き上げられて、泣き出しさうな顔をしてゐる老人とその孫らしい少年がやつと渡つて行つた處であつた。次に現はれたは紅色のスカートをつけたお轉婆らしい娘二人相互に手を握り合つて恐る／＼やつて来る。見物はわつと直ぐ次の瞬間に来る皮肉な情景を豫感し

て愉快がつた。

バタ／＼床が鳴り出した。火事の半鐘のやうにせはしく、さうして止まりなく。

娘達はキャツ／＼と云つて、飛び上り乍ら行く。ワ／＼と見物席では喚聲があがる。するとその次の瞬間、呀ッ！と／＼見物を見るべからざるものを見せられてしまつた。吹き上げる床からの風に、捲くられるスカートを兩手で抑へながら二人の娘の泣き出しさうな顔。

「馬鹿だな、あのお嬢ちゃん達、どうして猿又を着けないだらう。」

「暑いからな、大方田舎から出て来た娘だらうよ。」

私の隣にゐた二人の不良らしい青年は斯う私語き合つた。それにしても随分思ひ切つた見世物だ。客を種に客を釣るのだから——。など、思ひ乍ら、興に引かされて見てゐると、「大將」と肩を叩く者がある。ふりむくと、髯もぢやな四十男だ。

「エヘ——、あんなのより、もつと珍藝をお目にかけてやうぢやないか。」

と、にたりと来た。

「幾何だ。」

「弗さ。高くはないぜ」
好奇心に驅られて後からついて行くと、スケート場の脇を過ぎて便所の横の小さい道を行つた。
男は、一寸後に警戒の眼をやると、無雑作にドアを開けた。ボタンを押すとすと音なくエレベーターは降りて行く。

「婆さんお客さんだよ」

と、云ふ男の聲に、香の曲つた裏のやうな婆がドアの内から顔を出した。約束の一弗を渡すと内に這入れと云ふ。

バツと明るい光が眼を射る。十脚ばかりの椅子とテーブルが、統一なく並べられ、正面の大鏡の前の数臺のベッドやソファアに、半裸體の妙齡の女が四五人、寝こんだり蹲くまったりして、煙草を吹かしてゐるのだ。よく見るとその内の二人はどうやら見覚えがあるやうだ。さうだ最前吹き上げ床で、際どい曲藝を演じた田舎娘達だ。なるほど、さうするとあの珍藝は、やつぱり、此の見世物のトリックに過ぎなかつたのだな。

「どうだな、みな綺麗だろう。三弗なら安いぜ。お這入。」

喉の奥でそう云ふと横の扉を開けた。四疊敷位な室の内に古ぼけた複寢臺をちらりと見た私

「ノウ、サンキュウ。」

くるりと身を返して部屋から逃れ出ると、階段を駆け上つた。

失戀の鼻

モス、テリーは私の亞米利加に於ける最初の思出の女性である。

芳妃正に十八歳、ラテン系特有の艶々しいブロードな髪、地中海の海底みたいに澄んだ、コバルトの双眼に、常に青春の神秘な扉を開くべく、惱ましく魅力に濕ほへ輝き——と書けば、最早や一個の美しい佛蘭西人形のやうな小女を空間に畫くことが出来る。が、次に發表しなければならぬ不幸なる事實の爲め、實に彼女は皇妃デヨセフケン、又は名女優サラ、ベナールの血を繼いでゐないことを證明されるのである。

さらば彼女の唇が、大學生の赤靴のやうに平たく横に擴がつてゐたか、それとも、顎骨々膜炎患者の如く左右に斜面を象どつてゐたか、それとも兎唇、出つ齒、そり口、否、彼女の唇は

尋常で面かもルビーのやうに紅く蟲惑的である。

彼女の鼻は、寄席の音曲師の唄ふ都々逸の哲學を立派に證明して、ちやんと「顔の眞ん中」に存在してゐるのである。が、その先きがほんの少し、凡そ、幾何學的に七度ばかり空を吹いてゐるのである。尖端が釣のやうに曲つた狡獪と、隱險をまさまさと牛酪の如く見せる猶太人でないことを誰よりもよく明らかにする代りに、正面より見る時は、顔中が、二つの眞黒な種子狀のトネルのやうに、どこか、氣の抜けたビールを寒夜に呑んだ時のやうな、冷たさと、寂しさと、あぢきなさを感ずる。

だが、彼女は、ウォールウオースの塔より高い自尊心をもつたヤンキー娘の一人である。女々しくもうつむいたり、手を被つたりしない。晝飯時の食堂から漏れ来る、うまさうなバター、胡椒の匂ひをその開かれた大トネルから鯨のやうに吸ひ込んで、彼女の空腹に鋭い、刺戟を添加しせめる。

兎も角、ミステリーは美人ではない。

だから映畫女優でも廣告娘でもない。

彼女は、一日本人經營の洗濯工場の女工なのである。さうして、加州オークランド市衛生吏で一週十二弗五十仙の月給をとる、ジョン、コラード氏の令嬢である。だから、彼女は、毎日史紗木綿の仕事着に、千九百十二年のクリスマスに父ジョンの賞與で買つて貰つた、廉賣市場物の赤い二弗三十仙の帽子に、木綿の沓下をはいてゐる。さうして、六七十人の男女工の立ち働くこの洗濯工場で、一番年の若い未婚小女である。

此處で私のことを少し書いて置く。そもそもこの工場主である和田宗一は、私の中學時代の友人で、彼は今より十數年前、東京の××専門學校を出て、更に、斯學研究の爲め、フィラデルヒヤの、大學に留學し、天晴れアメドク——「これは彼の言葉通り」——になつたが、すつかり足を洗つて、改心して——これも彼和田の言葉だ——が洗濯屋の親方となつて成功した！、アラメダ商業會議所議員で、洗濯業組合理事と云ふ名譽ある肩書を持つた變り者である。で、この移民成功者である彼としては、中學時代の同窓の舊友が、志を抱いて渡米したに就いては、態々桑港の波止場に自ら自動車を以つて迎ひに出で「當分、僕の家で遊び給へ」と、一室を與へ、鬮の刺身や、西瓜を毎日のやうに喰はして、國賓待遇ではない、洗濯物得意先同等待遇で以つて敬

意を表した。

だが、この高等居候である私、何しろ忙しいので土曜日の晩と日曜日しか、和田が私の爲めに外出して呉れないので、室に籠つて、一日を費すことのさても退屈になつて來た。で、自然工場へ行つて、職工達の働くのを見て暮すことになつた。

即ち鍛室で彼女の可憐な姿、殊に特異の空向いた鼻を發見した譯である。

さうして、彼女から、最初の亞米利加淑女へ對する禮儀を教はつたのである。即ち、或る日二人の男工が何かの事で云ひ争つた時、横から一人の邦人男工が大聲で、

「Shara Up」

と叫んだ。すると彼女、持つてゐた鍛をがちやんと床へ投げると、ぐつと背を延ばし、その特異の鼻を思ひ切り空吹かせて、その邦人男工を睨みつけた。すると彼、邦人男工、いくぢなくも右手で耳の後をかき乍ら、赤い顔して小腰をかめた。

「御免なさい」

争つて二人の男工も、きまり悪るさうに鍛を手にして仕事を始めた。不思議さうな顔して

ほんやり見てゐた私に、

「Keep your mouth, this's right」

彼女は、小學校の先生のやうに云ふと、につことした。なるほど、シヤラアップ、Shut upで、「黙らねいか」だ。こいつは淑女の前で云つちやいけないんだと、私は感心した。と共にがぢやりと鍛を投げた彼女のヤンキー娘らしい勇敢な態度にも、變な感心をさせられた。それからよく、彼女は、悪い訛言葉の解釋をした。新來の日本紳士のよき語學教師と云つた態度で、優しく話して呉れた。

が、悲しいことには、私は間もなく、この鼻のために失戀した、シラノド、ベルジュラツクの妹のやうに彼女を泣かせて仕舞つた。

と云ふのは、ある日——多分西洋の女達が凶日だと信じてゐる金曜日だつたかも知れない——彼女が、配達係の女工の缺勤の代りに、洗濯物を自動車で配達することになつた。工場の前に置かれたフォードのガタ自動車——、トラックでは男工が配達するのだから、女の配達人は普通の自動車である——の上から、丁度、その廣場の草の上に寝ころんで、うろ覚えの流行歌「オーマイデー」を口笛で、五月の加州の大きに吹き鳴らしてゐた私に聲をかけた。

「一緒に行きませんか。パークレー。百萬長者の丘で綺麗ですよ。」
私は、起き上つた。だが、一寸躊躇した。

「行かない。」

「有難度う。」

私は、やはりむづ／＼してゐた。

「Hay. Come on!」

彈かれるやうに、私は、彼女のまねくフロントシートに飛び乗つた。

私達の自動車は、アラメダの釣橋を渡り、賑やかなオークランドの市街を横ぎり、パークレーの丘の緑の樹間を登つて行つた。豪華な文化住宅の前を過ぎる時彼女は、後に積んだ、ハトロン紙包の、シャツや、カラーや、パンヤマを、ほん／＼と道から、廣い草花の庭を隔てた玄關へ投げた。宏壯な家の前では一つ一つ、これは、商事株式會社長何々氏、これは、石油王何々氏、これは、銀行頭取何々氏の邸と説明し、見下された街、海峡、海峡の向ふに霧に包まれたが桑港

で、世界で倫敦と桑港が一番霧の深い街だなどと此處でも、彼女は女教員の口調で説明して呉れた。

丘を下りて、私の希望するまゝに、私達は車を下りて、加州大學の校内を歩いて行つた。

フットボール競技場、水泳のプール、丘の上の野外劇場などを見、やがて、何んとか云ふ金持の寄贈したと云ふ燈臺のやうな高い塔の前に來た。

「上つて見ない。」

彼女は、その切符賣口で二枚の切符を買ふと、やがて二人はエレベーターで塔上に登つた。塔上には一組の學生の男女がゐるが、私達が上ると直ぐ降りて行つた。

彼女は、最前、校の入口のスタンドで買ったチョコレート板を半分にして私に呉れた。青銅の欄に寄り乍ら、湖水の向ふ堤の立木の枝に遊んでゐる夕日を見つめてゐると妙に感傷的になつて來た。

「有難とう。ミステリー。今日は實に私は幸福だつた。」
日本英語で／＼と云つた。

「幸福、妾も幸福だわ。」

彼女は小女らしく頬を赤めて云つた。さうして私の右手を堅く握つた。私はふと最前、野外劇場の階段を上る時、直ぐ眼の前を上る、彼女の二つの卵色の木綿の沓下の如何にも貧しげなのを思ひ出した。せめて、この貧乏な衛生吏の娘に一足でもいい、絹の沓下を着けさせて、萬能館のボックスに座らせて、貴婦人らしく微笑させて見たいと同情した。

「次の日曜、何處かの活動に行きませんか。」

彼女は、一寸耳をかしけた。私の發音が變だつたからである。

「次の日曜、活動へね。」

彼女は、軽るくうなづいて微笑むと、

「有難度う、是非ね。」

あゝ、その時である。彼女はあまりにも興奮して、私の肩へ兩手をかけると、

「I like you」

とその唇を私の顔にかぶせたのである。

欠

欠

て行つた。

さうして、私達は自分達の自動車に辿りつく迄誰も無言のまゝであつた。

闇の自動車

自動車王国の亞米利加では、外出と云へば必ず自動車のハンドルを握ることゝしてゐる。どんな貧しい百姓でも、最下等の労働者でも、フォード位の一臺を持たぬ者はない。だから、日曜の教會行はまだしも、公園を散策するのにも、自動車でやる。公園の風景などを愛賞することより、ぐる／＼広い車道を廻つて歡樂する方を悦ぶ。だから若い男女の嬉曳も、勿論この自動車を利用せずに置かない。進行中の自動車の後の窓のカーテンは如何なることがあつても閉めてはならないと云ふ嚴重な法律はこんな事から出來たか？

K君に案内されて加州大學のあるパークレー丘に行つたが、美しい緑樹の間に別荘風の住宅の點々と建ち並んだ坂道をのほりつめて、とある曠原に達すると、其處には政臺の自動車が止まつてゐるが、別に人影は見えない。

見下ろされたオークランドの市街遙かに海峡を距て、桑港の大廈高樓が霧の中に浮き出て見える。その美しい風景を鑑賞するために来た人達かと思ふと、決してそんな雅趣からでない



ルーガー キンヤの上山

云ふ。なるほどよく見ると、どの車も堅く窓のカーテンを下ろしてゐる。中には愛し合つた同志が甘い私語に陶酔してゐるのだ。

「夜になると、この曠原一杯になりますよ。」

とK君が説明して呉れた。其夜、K君に案内されて、アラメダの飛行場に出かけたが、その廣い草原に灯を消した自動車の多いこと、多いこと。斯うした密會者を取締る風紀係のお巡りさんがオートバイで間断なく見廻つてゐるさうであるが、とても取締り切れないと云ふ。さうした暗い自動車の側を私達

矣

が過ぎる時、定まつたやうに今迄聞えた話聲がばたつと止んで、丁度秋草を踏んだ時、びだりと止まる虫の音のやうな静寂さになる。悪戯に此方も灯を消して速力を緩め、近づいて俄にヘッドライトを點すと、驚ろいてガタ／＼と走り出すのがある。

橋畔の曠大なるゴルフリングを過ぎる時K君は車を止めて云つた。

「此處の凹地が、先達一日本人が、十二になる亞米利加娘に暴行して檢舉された處ですよ。なあに、暴行なんて嘘ですよ。合意の上だつたさうですが、折悪しく巡廻の巡査に発見されたのが運命だつたのです。相手が毛唐でせう。それに未だ十二やそこいらの娘だつたので騒ぎが大きくなつたのです。日本人會など随分執行猶豫の運動をしたらしいんですが、婦人矯風會の會長とか云ふ婆さんが頑として聞入れなかつたため、重刑を課したらしいんです。」

果實園の女王

ロス、アンゼルスマーケット街は日本の街を歩いてゐる感じた。日本人ばかり歩いてゐると

云つてもいい、ドクトル菅田君の案内で、此邊の裏街に在る日本人カフェーBの女將お兼さんに逢ひに行つた、途中、とある家の前の薄暗い軒に十人近い日本人、メキシカン、イタリヤンの労働者風の男達が列をなしてゐる。

「見世物ですか。」

と聞くと、菅田君は笑ひ乍ら、

「あれですよ。日本の娘子軍とい奴。何しろ今夜は土曜日ですからね。」

「へーッ」

Bカフェーでは丁度お客が少なかつたので、馴染の菅田君の紹介で女將のお兼さんに逢ふことが出来た。もう五十を過ぎたお婆さんではあるが、つやくとした顔、すんなりした肩、何處か仇めいて、残の香の失せぬ面影があつた。

彼女は、今から三十年前之の加州に來た、當時、移民に來た日本人はもとより、毛唐の男達を手玉に取つて貯めたその金で今は有福に斯うしてカフェーの女將に納まつてゐる。年中豊饒なキャリフォルニアの平原には果物に野菜が出来る。その平原を、緑色のカーテンをおろした寢臺

仕立の馬車に乗つて縦横に走驅する女達は、飢えた狼の懐に在る弗を集める小鹿とも見られやう。お兼さんは、一日四十餘名の男から、弗札をまき上げたレコードを持つてゐる。恐らくお兼さんの記憶に残る男ばかりで數萬を算することであらう。

「辨慶は千人斬の願を掛けたさうですが、妾はその願を二つも抱いてゐませう。それでもよく死なずに、未だ斯うしてゐる處を見ると人間つて強いものですね。」

お兼さんは、その福々しい頬に大きな鬢を見せ乍ら笑つた。

夜行列車寄談

桑港から北上してデンバーに行く、ユニオンパシフィック線の列車中の出來事——。

私の座席の前には、二十二三の丈の高い佛蘭西系らしい美青年が座してゐた。彼は、私に南加大學の學生であると稱してゐたが、締めてゐた革帯には、私の聞いた事もない學校の徽章をつけてゐた。退屈な長い列車旅行のこと故、私は直ぐ仲のいい友達になつた。外國人の誰かが問ふやうに、先づ私の職業なり、何の目的で此の國へ來たかを問ふた後、自分が學生であることや夏期

休暇でデンバーへ歸るのだと云ふやうな話を初め、變つた日本の風物や、大學生々活なぞを興味ありけに聞いたりした。さうして、うつりゆく窓外の景色を一つ／＼説明し、呉れた。

此の列車の沿線は亞米利加でも有名な景色のいゝ處で、吾が木曾川に似た、グランド・キャニオンの、有名な大鹽湖だの、或は雪を頂くロツキーの遠望だの、殺風景な米大陸の旅行中で珍らしく興味深い處がある。

で、此の美しい大學生の呉れた名札には、ヴァレンタとある彼は、常に其の活々とした青い眼に笑を溢へ乍ら快活に、丁度佛蘭西の若い詩人のやうな口調で、この壯大な自然の美を讚め十八世紀のあの黄金狂時代の話をするのであつた。さうした二日を過ぎた夜のことである。食堂から歸つて來ると、もうすつかり寢臺は設備されて各々の席は綠色のカーテンがおろされてゐた。私は、なんの氣もなく、自分の席のカーテンをのけて這入らうとした。すると、其處には立竊の大きい喇叭ズボンと並んで、二本の肉色をした可愛い、スタッキングの脚が行儀よく並んでゐるではないか。

「おや、席を間違へたかな。」

すぐ突込んだ首を外に出して、カーテンの上部を仰ぐと間違ひなくと記した私の席の番號だ。其處へ、ヴァレンタがカーテンをのけて内部から出て來ると、周章へた調子で、

「一寸、一寸、其處まで一緒に來て下さい」

と口早に云ひ乍ら、化粧室の方へ私を誘つた。

「實は私の友達が遊びに來てゐます。今夜だけどうか、私の寢臺と貴方の寢臺と代へて頂けないでせうか。」

とつてつけたやうな丁寧な言葉でべこんと頭を下けた。私は思はずにやりとした。

「その代り、貴方の下段床に對しての料金の差額は上げますから、ね、お願いします。」

彼は、ポケットから弗札一枚を私の前に差出した。

「いや、金は入りません、代つてあげませう。」

私は太腹な見得を切つた。だが私としては、此の時彼が、彼の女に對しての小さい虚榮心から、下段床にゐるのだとのみ思つた。私はさうして餘程氣を利かしたつもりで、彼が喜んで寢臺へ歸つて行つた後を、喫煙室に這入つて、數本のチエスターフィールドを煙にして時の過つのを

待った。

やがて私は寢臺に歸ると、靜かに梯子を上つて上段の床に這入つて行つた。さうして、寢衣に着代へると狭い寢床に身を横たへた。どの寢臺も靜まつて、微かな鼾の漏れてゐるのさへある。すると、その靜かな空氣をふるはして、

「嫌よ。」

微かではあるが、甘つたるい女の聲、私は思はずはつとした。そしてがさ／＼と寢返りをしたやうな音、次いで、ヒューと口づけの音——私は聞いてはならないものをとう／＼聞いてしまつたのだ。

翌朝、洗面所で顔を洗つてゐると、ヴァレンダーが腫れほつたい腫をして這入つて來た。

「お早やう、昨夜はお蔭様でよく寝むれたよ。」

と、私。

「済みませんでした。今朝その埋合せにウント御馳走しますよ。」

と、氣の毒さうに云つた。

食堂車の朝食を攝り乍ら彼の語る處に依ると、昨夜の女は全く一晚の御友達に過ぎなかつたのだ。加州のミニユースカレヂの女學生で、昨日此の食堂で、知己になつたものと云つた。しかし、ミニユースカレツチなら一番風紀の矢筈しいキリスト教の女ばかりの學校であるし、彼女が二等車格のツーリストカーに乗つてゐた處からして可笑しい。そこで私は彼に問ふた。

「で、君は、彼女に何か與へただらう。」

「勿論、私は、彼女に三弗と、ネクタイピンを記念に與へたのに違ひありません。」

なんと皆さんお判りになりましたか？

手首の誘惑

コロラドの山上の驛で市俄古行の列車に乘替の約九時間を利用して、長い列車生活の垢を落すべく、驛前のホテルコロラドに休憩した。六階建の餘り大きなホテルでもなかつたが、新築して間もないと見え、すべてが新しく氣持ちがよかつた。

熱い湯に浸つて寢臺に寝ころぶと何時の間にか寝むつて眼をさました時はもう夕陽が西の窓の

カーテンの隙から、弱い光りを床の上に長く引いてゐた。空腹を感じた私は、服をつけると室を出た。さうして丁度上つて来たエレベーターに飛込んだ。エレベーターの女は、此んな職業女に似合ぬ美しい貌をした女だ。

「何處へ行きますよ。」

彼女はボタンを押し乍ら愛嬌よく云つた。其時私は、彼女が、此の暑いのに、鞆皮の手袋を嵌めてゐるのに腫をやつた。

「夕飯を喰べに、何處か、近くに甘い物を喰べさすレストランはない。」

と、云ふと、

「澤山にありますよ。」

と、一寸言葉を切つて、

「オリエントがい、でせう。東洋風の料理だから。妾教へませう。六時になつたら妾、家へ歸

Mar Nellie S. Bruce

Houston
Tex

March 2nd. 1928.

(てにスサキテ) ンイサの女加利米亞

りますから。」

そこで、私は、彼女にチップとして五十仙の銀貨を一枚奮發して、階下のバーラーで待つことにした。間もなく彼女は、人絹ではあるが襟から胸へ掛けて、美しい花模様の衣装に、着更して真白い毛のついた帽子迄冠り、化粧した美しい顔をにこつかせ乍ら出て来た。實際斯う着飾つて見ると、何處の淑女かと思はれるほど、美しく氣品のある女だ。ホテルの横に置かれた彼女の小型のフォードに私を乗せると彼女は運轉臺の人となつた。其の時やはり彼女は、あの卵色の鞆皮の手袋を嵌めたまゝの手で、ハンドルを握つてゐた。どうせ山間の小都會の事として、一本筋の單調な寂しい街である。でも、家々は明るい灯に輝いて、夕方らしいあはたしさを漂はせてゐた。やがて車は、主要街らしい繁華な通りの、とあるレストランの前に止まつた。オリエントとは名ばかりで、内部に這入つても、東洋風な裝飾のあるのではなかつたが、給仕の持つて来た料理表には、五六品の支那料理の品名がつけ加へてあるばかりだ。

そこで私は、CHOP, SUEYと他二三品を注文した。彼女——キチーと稱んだ——は、非常に幸福さうに見えた。さうして、其處のテーブルで食べてゐる他の客達が、毛色の變つた日本

人と彼女が話してゐることを不思議さうに見るのを少しも心に置かぬ様子で、愉快にはしやいだ。やがて注文した品が運ばれて来た。

彼女は、東洋風な料理——と云つても、亞米利加化した支那料理、例へば、チャプスイとかチヤウメンとか、八寶菜のやうなものに過ぎないが——大變に好きだと云つた。だが、彼女のスペインやフオークを持つ手はキッチンと手袋のまゝであつた。

食事を終ると、彼女は、一緒に活動に行かうと奨めた。彼女は丁度、そのチャップリンのサーカスが此街で今大變な人氣だと云つた。しかし、私は、十時の列車に乗らなければならない事を理由に、ホテルに歸ることにした。

ホテルの門口で當然、別れることだと思つてゐた彼女は、

「部屋迄お送りします。」

と、云つて私に續いた。これは私を少し驚かせた。それは彼女が、さうした倫落女としては餘りに無邪氣であり、素人臭い態度であつたからである。彼女はホテルに遣入ると、晝間このホテルでエレベーターの運轉をしてゐると云ふことなど、忘れたかのやうな顔付で、平然と私と並んで

歩いて行つた。

部屋に遣入ると二人はソファに腰をおろした。やがて自然に身を寄せ合つた。私は彼女の右手を握つた、とたん。

「呀ッ。」

彼女は、身を引いた。瞬間、あゝ、なんとしたことが、彼女の手はその手首から抜けて、私の手には、鞣皮のまゝの堅い木のやうな義手が握られ、私の鼻先には、眞白な棒のやうな指のない彼女の腕がぶる／＼と慄へてゐるではないか。

「ワッ。」

と床の上によろけ倒れた彼女。

奇怪な恐怖に戦慄き乍ら、義手を手にした私の顔。

間もなく、泣いてゐる彼女の膝の上に、その義手を丁寧に置いて、ケースを握つた私が扉の外に出ると、脱兎の如く階段を下りて行つた事は語る迄もない。

魔都市俄古

人口四百萬、紐育に次ぐ米國に於ける大都會、ミシガン湖畔に近代文化の華と誇る市俄古は又世界に於ける大都市として『世界第一』を誇る數々のものを持つてゐる。

八萬スコエヤーの敷地を領し、客室三千を有する巨大なるステブンスホテル、近代建築工藝の代表、ニューフェールド博物館、毎日數萬の客を呼ぶ大雜貨店マーシャル、フキールド、或は一時間八百頭の牛豚を屠殺し毎日百萬弗の賣上をする、スタックヤード屠殺場等々、さなきだに『世界一』を誇りたがるヤンキーの高い鼻をうごめかしめる幾多の物を持つてゐる。

と同時に、其の明るき大都市の暗黒面は、殺人、姦淫、賭博、あらゆる罪惡の凄慘場裡である。米國に於て最も犯罪の多い土地としての魔窟市俄古は、世界に於ける魔都市俄古である。米國人は、一口に犯罪市としてキャンサスを呼ぶ。だが、キャンサスなど云ふ小都會に比べて、大都市市俄古に行はれるものは、もつと大仕掛で組織だつたものだ云ふ。

酒を禁じ、私娼を取締るに、嚴重な法律を制定してゐる此國の代表都市に於てその白日の輝く街の上に、粉黛濃艶なる魔性の女が酒々として行き、ホキスキーの瓶を片手に千鳥足のチャールストンを踊り乍ら石敷道を行く紳士があり、殆んど全裸體に近き妖濃な姿で、輝やく舞臺に世にも猥劣極まるダンスを踊る女の見世物レビユーや、ミュージックコメデーが軒を並べて客を引くのだから其の横顔が如何に醜惡であるかは想像されるであらう。白晝銃器を肩に堂々自動車で銀行會社を襲ふ強盜團の横行、交番や警察署前でも通行人を強迫する剝奪盜の跳梁、私娼窟や、酒場や賭博場に於ける、戦慄すべき殺人争鬪等、等。

「灯が點つたら歩かない方がいゝ」とよく市俄古市民は云ふ。全くその通りである。何處を歩いてても、魔性の女が獲物を覗つてゐる。映畫のスクリーンから脱けて來たそのまゝの猙猛な顔をした惡漢がポケットに短銃を握つて、鼻のやうな眼を輝かせてゐる。支那人街とか、メキシカン街では、自動車で行くのも危険を覺悟せなければならぬ。

いざや、此の世界の魔都に於ける人類社會の罪惡を、或はミクロスコープにかけ、或は鋭いメスを揮つて縦横に剖見して見やう。

コメデーの花形

普通ミュージック、コメデーとかレビユーと稱せられるものは日本の寄席に相當するもので、観客は四百から千名位限りの小劇場で、入口には、さまざまの姿態をした裸體の女の寫眞をデカくと飾り、青赤のイルミネーションを輝かし人目を引いてゐる。内部は普通劇場と變りはないが、只普通の舞臺の他に、ジャズバンドのボックスを圍んで半圓形に観客席の方に日本の花道に似たものが突出されてゐる。此處では、數人乃至數十人の裸婦の踊り子が、奇怪なるジャズにつれて、世にも猥劣極まる尻振りダンスをやるのであるが、更に、その中のスター一人が表はれて、次第に淫猥の度を増すダンスを踊り出す。彼女の踏んでゐる床からは、絶えず五色に變る花電氣を明滅させ、いよ／＼卑猥なジャズの曲は彼女の妙技を彌が上にも興奮せしめる。それをボックスの観客達はオペラグラスを以つて、息を凝らして見るのである。

メリー・ローレンスは、さうした劇場のスターであつた。私は、彼女のバトロンである土地賣買會社のS君の紹介で、ミシガンアベニーのカフェで逢つた。彼女は舞臺であれだけ濃艶な

ンスをする女に似合す。意外にも乙女らしい初心な十八娘であつた。彼女はルイジアナの百姓の家の生れではあるが、立派に中等學校も卒業し、相當教養も備へてゐた。彼女は云ふ。

「さうです。藝術としても最下級の藝術でせう、だが、観客に之れでもか、之れでもかと媚を強いる時の妾達の技巧だけは、買つて戴きたいものです。さうして、人間の本能が、或る場合に野獸の醜さをそのままに露はすものであると云ふ、深刻な哲理を證明するものが妾達であることを尊敬して下さい。妾達の舞踊の天才を認めて、妾をあの劇場より、もつと大きな舞臺に立つ様に奨めて呉れる人が澤山にあります。妾は却つて迷惑します。なぜならば妾達は遠いギリシヤや羅馬時代に於ける文化爛熟時代の藝術の更生者たる誇りを捨てたくないからです。」

花のやうな唇から漏れる彼女のやうな、藝術論を盡く肯定は出來難いが、考へやうに依つては一口に猥褻極まる尻振りダンスとけなす譯にもいかない。なぜならば、斯うした劇場へ屢々這入つて双眼鏡を通して擴大せられた彼女達の肉體の線の動きに息を凝らす観客の一人としての私であつたからである。

キツスの切賣

晴れた月曜日の朝。

ワシントン街とステート街の交又點、大きな六角時計の下に一杯の人群り。

「一體何事が起りました。」

自動車を止めて降りて行く朝勤めの銀行員、會社員——どうも急し事に於て世界一の亞米和加人であり乍ら、物好きに態々降りて、見に行く氣が知れないが——「妾達も見ませう」とミネソタ州邊から修學旅行で來た女學生の一團と一緒に乗り合はせた私も、バスの二階から押され乍ら降りて行つた。

群衆の取圍んだ中央に置かれた、臺の上に乗つた男。

「五弗、五弗、最初ですぞ、五弗、五弗、たつた五弗」

すると群衆の中から勢よく叫んだ。

「十弗」

「十五弗」

と次に少し、かすれた聲で、

「二十弗」

すると、臺の上の男、にやりとし乍ら、

「二十弗、オンリー二十弗。」

しみつたれた奴等だと云ひさうな顔。

「三十弗」

若い、中高音。

「諸君、假初にも某國の貴族の姫君ですぞ、貧民兒童の保育所建設のための資金調達ですぞ。

貴い彼女の珊瑚のやうな唇。三十弗や四十弗では……。」

臺の男は、ハンカチで襟首の汗をふいた。

「よし、五十弗」

「百弗」

「三百弗」

「五百弗」

「群衆は熱狂した。」

「五百弗、五百弗、もうありませんか。」

すると、群衆の一番後方から、濼い雑枯れ聲で、

「千弗——」

呀つと、群衆は後をふり返つた。聲の主は假禮服姿のみすほらしい七十近い老紳士、

「千弗——、もう此上ありませんね。おや、最初が千弗。」

老紳士は群衆を押し分けて、中へ這入つて行つた。間もなく、水色の衣裳をつけた、二十餘りの美しくい瞳をした娘と並んで、大時計の下の入口から、そのビルディングに消へて行つた。ほんやりとそれを見送る群衆へ、臺の上の男は云つた。

「おや、第二番目は？」

欠

欠

「どうせ盗んだ人の女房さ、機会が来たら捨て、しもうに手数はないよ。そうしたらクララの奴、又先夫のトミーと接合つくだらうよ」櫻井は他人事の様にのんきなことを云つてゐる。

撲られた伊達男

寒い風——穀でも持つて来さうなキャナダ風の吹く生誕祭に近い晩、ヴァン、ヴァレン街の裏通りの瀟洒なメキシカン料理店。アイロンではとてもこんな美しくは、出来まいと思はれる黒い縮れた髪、黒曜石のやうな澄んだ瞳、而かも唇を女のやうに赤くした美少年の西班牙系の給仕が、舞踏場歸りの夜會服姿の私の懐の暖さを見抜いてか、ちやほやと御機嫌をとつてゐる。

「髪の毛の黒いクラブの女王様みたいのがるますがね。」

「西班牙人？」

「イエス、サア、映畫のムーア嬢みたいな可愛い、瞳をして、否々あんな、フラツパーなもんですか。」

「で、それが、君の甘い心臓と云ふ寸法だらう。」

「御談話もので……十一時迄待つて下さつたら、きつと御覽に入れますよ。」

その時、入口の扉が開いて一組の若い夫婦が這入つて来た。

男は、禮服の胸に白薔薇なんかを飾り、絹高帽に白い手袋、ルドルフ、マンチヨウ型の髻。

どうやら、白粉位は頬に塗つてゐるらしい巴里兒氣取りの伊達男だが、女は、凝ひ物らしい黒狐の襟をつけた色の褪せた外套、冠つた帽子だつて二十五年型の競賣物だ、白粉けのない顔は冷い風に吹かれたせいか、病的に青白く、下顎が突き出た先づ美人とは縁遠い方、無理に賞めるとしたら、先づ番茶も出花の娘盛りと云つた張ち切れさうな腰、眞直な脚と云つたところだ。

二人は、私の前を通つて一番奥の卓に着いた。肥つた今一人の給仕が、御用を承はりに、飛んで行つて小腰を下けた。だが、コーヒーと、ハムのサンドウキツチの注文に、いさ、か、當てが外れたらしく、賣臺の番頭と、片目をつぶり合ひ乍ら、苦笑した。美少年給仕は私に話しかけた。

「つまり、彼女は女優ですがね。」

「女優、寄席あたりだらう。」

「勿論ですとも、ですが、彼女は不幸にして踊りの天分を、彼女の母親の腹の中へ忘れて来たのださうで、ハア……つまり、萬年エキストラで、そこで一人のバトロンを慾しがつてゐるんです……」

とたんに、がちやりと、瀬戸物の毀れる音がして、——びしやり、平手で頬を叩く音がした。ガタコトくと靴の音がして、私の卓の前をすつと通り過ぎた女の姿は、扉の外へ。

見ると、奥に陣どつた例の妙ちきりんな男女の一對の卓では、頬を右手でさすり乍ら、コーヒーと間違へてソースでも、もろに呑んだやうな泣きつ面。

「いやどうも。」

肥つた給仕、小さい眼を丸くして、扉の方をほんやり眺めてゐるが、

「オイ、呼んでくれ歸して呉れないか、兄弟。」

と、私の卓の美少年に云つた。

「オーライ。」

美少年はエツブロン姿のまゝ、入口を飛び出した。肥つた給仕は、床の上へ毀れた茶碗を拾つ

て料理場へ去つた。

「彼奴、ク、ク、氣狂ですよ、ヒステリーと、ガソリンの切れた自動車ばかりは何うもなりませんやね。」

伊達男先生の氣まり悪るさの持つて行き場に困つた顔。

客も、番頭も給仕も、笑を噛みこらし乍ら見て見ぬ風。

間もなく美少年に連れられて、女が再び姿を入口に見せた。伊達男先生、椅子を離れて彼女を抱へるやうにして元の席へ、美少年給仕に五十仙銀貨一つ擱ませて、

「熱いコーヒーをもう一杯。」

それを、ちらりと見た其處の一同、むろん、私もその一人であるが、

「何んて、甘い野郎だらう。」

口あたりから、自然に浮び出た微笑が、次第に擴がつて、遂に酒場中を包んでしまつた。

日本語で叱られる

出鱈目に女を威張らす亞米利加は、その變態に近い形式的な禮儀に異國の旅行者を惱ましめる人通りの少ない街路傍で、解けた靴紐を結びかけてみると、通りかゝつた警官が「淑女が来たから止めろ」と注意をする。百貨店の昇降機の中で。女中らしい女が一人這入つて來ても乗り合はせた男たちは一せいに帽子を脱らなければならぬ。女の前では、腰から下の話どころか、便所のべの字も口にしてはならない。いやもう此の點、解放的な日本人などの窮屈なこと、云つたらだ

が、此の話は、日本でも餘り感心出來ないことだが、場所が米國の而かも紐育の眞中だから一層皮肉で滑稽である。

ブロードウエー百五番街から四十二番街迄乗つた地下鐵道のカーの中、若いニューヨーク大學生の同胞K君と私は、乗合客の少いのを幸に、聲高に日本語で、ヤンキーの悪口を云ひ合つてゐた。丁度向ふの席に坐つてゐた事務員らしい女が短いスカートの下に、安劇場の踊り子みたい靴下もつけぬ素足をむき出して得意氣に、チューインガムをむしゃくくと、噛み乍ら新聞を讀んで居たのに話題が轉じた。

「御覽なさい。あの恰好を、まるで、原始時代の女ですね。絹靴下が脚に害があると云つた何とか云ふ博士の説から、衛生によく、優美だと云ふので、聖林の女優たちから流行したさうですが、今時、亞米利加インディアンだつて、あんな恰好をしてるませんでせう。」

K君は、不愉快らしくそれから瞳を離さず云つた。

「それにしても餘り美しい脚ぢやないね。」

「面も拙いちやありませんか。」

「殊に依ると、餘り眞面目な女でないかも知れないね。」

「辻君の方ですかね先づ非相場と云つた位な。ハア……」

その時、突然二人の肩を後から軽く叩いて、

「もし、アナタがた。」

と明瞭な日本語の女の聲、ふりむくと何時の間に来たか、黒いドレスの五十餘りの綺麗な亞米利加婦人が肩を寄せてさも不愉快さうな顔をしてゐる。

「アナタがた、ニホンのシンシでせう。コンナトコロでアメリカレデーのワルクチなんかいつ

てはいけません。」

「へーエ。」

二人は思はず顔を見合した。

「ワタクシは、ながいことヨコハマにゐました。コトバがわからぬのをい、コトにしてワルクチをいふことはよくありません。」

「いやどうも相済みません。勘辨して下さい奥さん。」

二人は叮嚀に帽子を脱つてびよこんと日本式に御辭儀をした。さうして間もなく停留場に着くと、逃げるやうに、飛び下りて、地上へ出た。

「驚ろいたな。あの婆さんの日本語にもこれぢやうつかり、日本語でも悪口は云へない。ハア……。」

二人は思はずほつとして首すぢの汗を拭いた。

近代淑女俱樂部

「さうです。まあ云は、時間を如何にして空費しようかと困つてゐる貴婦人達の享樂機關と云つたやうなものです。華麗ですよ。巴里のヴェルサユ宮殿を模倣して建てたものさうです。が、燦爛たる天井、欄間、壁、柱、素晴らしい殿堂です。其處へ孔雀のやうな装ひを凝した貴婦人達が灯を慕ふ火取蟲のやうに集まつて來るのです。だが絶対に男子禁制です。

ちや何をするんですつて？ 一口に云つたら賭博ですね。さうです。先づブリツヂ遊びですね。ホーカーもやりますよ。私の仕事はそのホールの給仕です。男子禁制であるのに不思議なことに給仕だけは男を採用してゐます。仕事と云つても簡單です。六時前にホール全體の掃除をやり、それから、這入つて來た彼女達のオーバを脱して、保管する。競技が始まると、其の側に立つて酒や茶を命ぜらるゝまゝに運ぶ。だが彼奴等は實に贅澤と我儘そのものみたいな者ですよ。例へば、烟管を啣へると、直ぐ僕達は夫れに卷烟草を差して、火を點じてやらなければなりません。或ひは假りにカードや骰子が床の上に落ちたとする。直ぐ私達は夫れを拾つて卓子の上に置かなければならぬと云ふやうな具合です。一晩で何しろ五萬弗、十萬弗の勝負ですから、素晴らしいでせう。勿論、現金ぢやありませんとも。小切手の取引ですが、中には負けて來ると亂暴な

ことをやりますよ。先達も英國の貴族の夫人が、負けつゝけて、仕舞には三十萬弗とかの眞珠の耳環りを賭けたりして評判でした。

ですから、此處へ出入する女は、凡そ紐育で、否、米國で、もつと大きく云つたら世界中の社交界で知られた名流婦人でなければなりません。服装など毎晩取替へて來るのですが、面白い事には誰か一人が變つた新スタイルをして來ると其の翌晩は皆一樣にそれと同じドレスを着て來るんですから、どうせ「生存とは享樂なり」と思つてゐる連中ですから淫蕩なことは疑はれません。あの俱樂部にはないやうですが、彼女達の爲めには別に立派な密會所とか、舞踏場があると云ふ話です。有名な千九百二十三年のダイヤ事件など御存じかも知れませんが、あのホールへロシアの皇族夫人だと云つて來た女装の悪漢が、麻酔劑を利用して居合せた貴婦人達の装身具を片つばしから奪つて逃げたなど、考へて見れば滑稽で、氣の利いた監督なら、映畫に撮るにも馬鹿くしいと斥けるやうな事です。ハア……。

どれ四時になりましたね。ほつ／＼出掛けるとしますかな。語り終つたK君は、その美しい瞳を活々と輝かせて、椅子から腰を上げた。コロンビヤ大學の

政治経済科に学ぶK君は學資を得る爲めに、毎夜、五時から十時迄、此變つた仕事をやつてゐるのである。

謎を解く

世界第一の明るい巷と稱ばれるタイムス、スクエヤーのまぶしい光から脱れて北村君と私は、とある露路の小さい料理店に空腹な腹を抱へて飛び込んだ。賣場に着くと二十三四のスパニッシュ系らしい女が注文を聞きに、二つの氷水のグラスを持って来た。私は夫々好みの品を二三品注文した。もう夕食時間が経過してゐたので、客は私達だけだった。私は注文の品の來る迄其處にあつた新聞を読み初めた。私が巻煙草を口に喰へると、立つてゐた女は、すぐ、エツプロンのポケットからマッチの軸を出して、器用に卓の裏でチユと燭して、火を呉れた。

「おや親切だね。」

思はず、斯う云つて、北村君と顔を見合した、實際、現金な亞米利加女は、初めての客には、——殊に斯んな小さな料理店などでは特にさうだが——只注文の品さへ運んだら、それで自分の

仕事の全部だと考へてゐる。チップは、自分の努力に對する當然の報酬だ、御世辭や特別な待遇

はエキストラだからやる必要はないと思つてゐる。

「ウム、ロキシー座では、

最後の露都」をやつてゐる

ね。獨乙物だらうが、随分人

氣だとある。」

北村君は演藝欄の廣告を見乍

ら云つた。

「それに、イタリアンのタ



ランテラ踊の名舞踏手が來てゐるらしい。一つ行つて見るかな。」

「そうだね、今夜はもう遅いだらう。」

側で私達の日本語の會話を不思議さうに聞いてゐた女は何を思つたか、その時、

「妾の任事、八時迄よ」

と云つて注文品を取りに奥へ急ぎ足で去つた。

「ハア……。奴さん、映畫の話が解つたと見える。」

北村君は愉快さうに大きく笑つた。

食事を終つて、傳票を取り取る時、北村君、

「此の露路の角で、私達は八時に貴嬢を待つてゐる。」

と口早に云つて出て行つた。

「来るだらうか。」

私は、餘りに簡單な北村君の交渉振りに、あつけなく思つたので問ふた。

「大丈夫、其處らを少し時間つぶしに歩こうよ。」

二人は、流行の帽子や服を着けた蠟細工の人形を飾つた洋服屋や、寶石や時計のキラ／＼輝いた店の飾り窓を覗き乍ら時間をつぶした。

八時を過ぐるこゝと十五分、エツプロンを脱いだ彼女は藍色のコートに空色の派手な帽子を眞深

く冠つて、今一人のコバルト色のドレスをつけた丸顔の女を連れてしやなり／＼とやつて来た。

「何處にしやうかな。」

北村君は馴れた調子で云ふ。

「クライス、ラリオンがい、は。今夜は一晚中開演よ。」

彼女は葉すっぱに云つた。

「他だつて、最後開演ならあるよ。近い處にしやうよ。」

間もなく、私達は、黄色車に乗つてリアルト座に行つた。其處で私達はまるで、十年の戀人同志のやうに並らんでボックスに掛けると、ムシヤムシヤ、チューインガムを噛み乍ら、喜劇俳優ロイドの馬車屋に腹を抱へ、美しいスパニッシュ女の踊りに感歎し、ジャズの曲王ホワイトマンの新曲に酔ふて十一時の閉場と共に出ると女達の誘ふまゝにレキシントン街の小さなホテルの客となつた。

「だが、亞米利加女は一度に限るよ。高い様だが、それ切りで後腐れがないからね。女房にしたり同棲したりするのは、金の有餘つた時の遊戯さ黄金エコール戀と云ふことを一番よく理解し

「てるるのは亞米利加女だよ。」
 歸りのバスの中で北村君は染々と私に云つた。

ハドソン河畔の女盜

ブロードウエーの、カフェテリアで、米國留學中の牧師さんH氏と、お好み料理をやつてゐるところへ、ぶらりと這入つて來たのは、背の高い日本人だつた。M新聞社特派員のSといふ人で、なかく痛快な人物。H氏と同窓といふので、二人はすぐ話を始めた。

「今ね、インタナショナルの横脇から、いきなり今晚はと女が飛出して來たので、すつかり度膽を抜かれた。」

と、H氏が云ふとS、君呵々大笑して、

「まさか取つて食はうとは云ふまいが、あそこに出没するのは大分凄いらしい。先達でDといふ日本の實業家が、とんでもない目に逢つたといふんだが……」と語りだす。

型の如く、登場人物は、その細い指にダイヤの優しい指環、チヨッキの胸には、斜に白金の鎖

を輝かした丈の低い日本紳士と、河畔の闇を漂泊ふ妖艶な街路女とである。場所は、私達に聲をかけた女の居た附近の樹の下、暗い夜はもう十時を過ぎた頃である。

「オールナイト。」

「勿論」

「幾何」

「十五弗。」

「近い？、家は」

「セントラル公園の直ぐ近く」

「よろしい。ゴウヘイ。」

と、萬事、亞米利加式に手早く運んで、Dとその女は、直ちに車上の人となつた。元來Dさん日本から來て、未だほんの二三ヶ月だが、生來英語の巧いのが自慢で、シャートルに着いた日から、此の方面を先づ視察にかゝつたほどの人、市俄古でもたつた一週間の滞在にも、ミシガン、アベニウ邊の巷の女まで経験したほどの男、本來なら今夜も友達に別れて直ぐ、タキシードホテ

ルに歸るところだが、態々、河畔をとほく歩いて来たところを見ると勿論下心のなかつた譯ではない。で、車の人となると、Dさん、もう馴れたもので、直ぐ、女とはむれ初めた。女が端を銜へて鼻先へ差し出したチユインガムを、その大きな鰐のやうな口を開くと、バクリと喰へてムシヤク、嚙んだりする。

車は、明るいブロードウエーを横切つて、セントラル公園の木立の道を走つて行く。

「もし、もし。」

遠い處から誰か呼んでゐる。

「もし、もし。もし、もし。」

肩の邊を叩かれて、Dさん、眼をさました。最前公園のあたりを走つてゐた時、うとうととしたやうに覺えたが、眠つたかしらん、それにしても五六分も経つたかな。

車は止まつて、開けられた扉の外に運轉士が立つてゐる。降りるのかな。見ると、女の姿がない。

「おい〜どうしたんだい。」

「どうもしませんよ、旦那、だが奥さんのお歸りが餘り遅いのでね。」
運轉士は困つたやうな顔。

「歸りが遅いつて、何處かへ行つたのかい。」

「戯談ぢやありませんぜ、旦那、最前、公園で、奥さんが、チョコレートが欲しいと云つたら貴方がウム〜と云つたぢやありませんか。で、態々此處迄、後歸りして、奥さんは其處の角のドラッグストワーへ、買ひに行つたんですがね。もうあれから、三十分以上も経ちますぜ」

「そいつは可笑しいぞ。」

D君、眼をこすり乍ら、外へ飛び出した。

そして、角のドラッグストワーへ駆けつけた。

「水色の服の婦人、ヘエあれですか。」

と、店のカウンターに居たボーイは卑しげに笑つて、

「コツカカラーを一杯呑んでもう三十分も前に行きましたよ。」

「な、な、なんだつて、三十分前に行つた。」

氣取屋のD先生、逃した魚の大きいのを、口惜がる釣の名人のやうな顔をして叫んだ。指が軽い。おや、日本を立つ時、妻君が、妾だと思つてと抜いて呉れた記念のダイヤの指環がない。ポケットは？ 無い。百弗ばかり入れた鱈皮のケースが、おやおや、チョツキの時計も。

「旦那、自動車を」

運転士が出した手を拂つて、D先生、むか／＼とした腹から吐き出すやうに。

「俺をホテルへ送つて呉れ、インターナショナルだ。畜生。」

吾が親愛なるDさんは、女の呉れた魔睡剤入りのチューインガムの爲めに、まんまと、眠らされ、金も時計も奪はれたが、生命だけはそれでも拾つた譯である。

私娼の請願巡査

ニューオルレアンスの海岸街の夜である。港の街特有の淫らな、異様な妖氣と、異國的な匂ひを漂はしたカフェーと料理店と、五十仙から十五弗と書いた ROOMS だの HOTEL などと怪しくもほの暗い電氣看板を掲げた家の並んだ、狭い露路通り——。

領事官のKと云ふ若い書記生に案内されて視察と出掛けた私娼、行きづまりや、暗い家の軒下に見る、マドロスパイプの物凄いい悪漢！ ではないが、生命の掛賣りなどはしさうもない、船員の顔に餘りいゝ心持もせない。

看板にマルセユーとした佛蘭西料理店、と云つた處で、内部は青ペンキで壁に、ベタ／＼と軍艦や汽船を浮べる大海原を畫いた賣臺だけの奥行、五六米に足りないカフェテリアなんだが。——

—— 日本式の、と云つても日本の洋食は佛蘭西流だから、その佛蘭西式のビーフステーキを好んで注文し、二人はそれを待つ間、しきりと、客の品定めを小聲の日本語でやつてゐた。

すると、扉を排して、靴音高く這入つて來た二人の男、お誂ひのカーキ色の服、左の胸に、キラ／＼光るニツケルの星印、短銃と水筒を釣つた革帶を大字に交叉し、股の邊まで包んだ長靴、白い棒を振り／＼。

「ハアロウ」

と、番頭に聲を掛けて、すつと奥の料理場に這入つて行くと、間もなく、にあ／＼笑ひ乍ら出て來て、

「O、K、グットバイ」
すつと扉の外へ消へた。

「馬鹿にしてやがらあ、O、Kもあるもんか………。酒の密賣を検べに来るんですが、奥へ這入ると、出されたホキスキーを、きゆとやつて、あの通りです。」

K君は説明して呉れた。

「未だ物凄いい奴御目にかけてませうか。」

そこで二人は、喰べ終ると急いで外へ出た。

ホテル、デ、デヨウジと云ふ古い七八階建の建物の扉を開けて這入る。入口の社交室を兼ねた玄關に置かれた椅子には六七人の汚い風采の男達が腰をおろして新聞を見たり、話し合つたりしてゐた。

隅の長椅子に腰をおろすと、K君が云つた。

「あそこのエレベーターの前にある巡査を注意してゐて御覽なさい。」

昇降機の前には一人の老巡査が、黒人ボーイと何かしきりと話してゐる。間もなく、二人連れ

の派手な衣装をつけた若い女が這入つて来た。唇の赤い、眉の隅の青い、誰が見ても善良な淑女とは思はれない彼女達だ。

彼女達は、巡査に何か云ふと、一人が、巻煙草の一本に火を點じて差出した。

「有難う。」

巡査は、それを受取つて甘さうに吸ひ初めた。

そこへ昇降機が降りて来た。二人の女はいそくと、それに吸ひ込まれて行つた。巡査は、それを笑顔で見送り乍ら、あゝあゝと大きく、あくびをした。

「どうです。あれは。私娼の請願巡査と云つた形ですね。時々本署からの臨検や、無頼漢の出入を、防ぐ爲めですがね。臨検ですか、やりますよ、然し、その場合、客の室ですと出張した女ばかり拘留ですが、女の室へ客が行つてゐた場合は、二人共やられるさうです。それにしても、請願巡査を番さしてゐる淫賣は世界の何處にだつてないでせうよ。」

K君は、歸りのタクシーの中で染々と話した。

大陸を流るる女

テキサス州の新都會ヒューストンの驛を下りて、驛に近いウキリアムペンホテルに着いたのは秋の日の短い午後六時過ぎであつた。餘りに大きくはないが、よく日本人の泊るホテルと聞いてゐる。新しいのが何よりである。這入つて突當りの受附で宿帳を書く。

「浴室附を頼む。」

と云ふと、

「三弗だ。」

と現金な番頭である。安いぞと感心して金を拂つてエレベーターに乗る。頭の頂上の禿けた下品な顔した給仕が、手提鞆を持つて案内して呉れる。室はなるほど狭いが、立派に浴室も附いてゐる二十五仙銀貨をボーイの手に握らせると、

「別びんは如何？」

にたつと笑つた。

「馬鹿鹿」

と笑ひ乍ら吐り飛ばすと、ゴム丸のやうに跳ね返つてドアを閉めた。風呂を浴びて、風呂着のまま、寢臺に寝ころんだところへコツ／＼と、ノックする音、

「お這入り」

と云ふと、靜かに扉が開いてすつと美しい女の姿

「ハロー。」

妖艶な媚の瞳が笑ふ。思はず、

「ハロー。」

と云つて起き上つた。

「妾に御用はない。」

「ウ……」

私は喉の奥に物が挟まつたやうな返事、吾乍ら可笑しい。すると女は、靜かに私に寄つて来て、

Ruth Russell.
De. George Hotel
Houston, Texas

メイスの女加利米亞

黙つたまふ、風呂着の裾から露み出した私の脛をシートで被せた。

「いや、どうも失禮。」

私は一寸恐縮した。ましまよ。此女、淫賣の癖に嫌に淑女のやうな眞似をするぞ——無暗な事を云つたら、どんな目に逢ふかも知れない。そこで私は、眞面目な顔をして、

「一體、貴嬢は何の御用で御出になつたのです。」

すると女は恥しさに、うつむいてしまつた。さうして、私の手を軽く握ると、

「ねいハニー」

とその美しくい唇を私の顔に寄せた。

それから彼女はなかく雄辯になつた。彼女等はワシントン州から来たのだと云つた。三人乃至五人を一組に、多くて十日短かくて一週間、行く先々のホテルで稼ぎ乍ら、此から南の旅をして、加州桑港に出で更に北部を廻つて、再びワシントンの郷里に歸つて行くのだと云ふ。その時に彼女達のトランクには一杯の着物や指環や腕輪がつめられ、手提げは一杯の札にふくらんでゐる。いや、さうなければならぬと彼女は云ふ。さうして、好いた男を選んで結婚する、——

——と云ふのは、彼女達の理想であらう。恐らく、西伯利亞の草原を漂泊ふジプシーの如く、旅から旅へ、彼女達の唯一の商品を賣つて、面白可笑しく其日々々々を過して行くのが事實であらう。

夜更けた下の街道を、けたましく警笛を鳴らして、蒸氣ポンプが過ぎて行つた。

「火事らしいな」

私の聲に、

「何處か燃えるでせう、妾達には何んの關係のないことだ。」

彼女は其の美しい瞳を天井に向けた。

黒人娘氣質

その日、テキサス大學在學のDに案内されて、ダラス軍と、ヒューストン軍の野球リーグ戦の四回目か、五回目の試合を見物しての歸り途、もう長い春の日も黄昏れて街は灯になつてゐた。

「黒人街。歩いて見ませんか、とても綺麗なのがありますよ。」

メリケンチャップのDは、不良らしくその瞳に淫らな笑を見せ乍ら誘つた。二筋の電車レールがやつと位な狭い車道を挟んで、二米とあるまい横幅の凸凹の多い、バナナや、烟草の吸殻紙屑で汚いコンクリートの歩道、其れを高聲に話し乍ら往來する、眞黒で顔の裏面の判り難い、彼等黒人男女。揚げる油の匂ひ、安葉巻の煙り、喧騒、放歌、暮方らしいあはた、しくも氣味の悪い黒人街の夕である。

でも、彼等の爲めに設けられた、黒人専門映画館は、投縄を手にした馬上のカーボーイの勇ましい姿の大きなベンキ繪、看板の前で赤いモーニング姿の黒い男が、大聲で人を呼んで居り、賣臺の勘定臺の前に肥つた佛蘭西人らしい老婆の居る、カフェーでは、デキシールバンドの、狂犬の鳴き聲みたいにサキソフオンが鳴りつゞけてゐた。

「何んと云つたつて、此處は彼等の城廓ですよ。巡查だつて、電車の運轉手だつて、黒さんですからね。」

Dは銜へたオールドゴールドの吸さしを、ほんとと車道へ、ほり乍ら云つた。

「ハロー、白人紳士」

その四辻の暗い角から、呼んだ聲に、立ち止まつた二人。だが、其處の暗には、白い靴下の二本が見えるばかりである。

「HALLO。」

二三歩近づいたD

「NO, THANK YOU,」

軽く手をふつて引返すと、

「黒い夜鳥です。ハア……夜鳥は店を開くのが早いな。でも、白人紳士は可愛い、ぢやありませんか。」

やがて、私達は四つ五つの街を過ぎて、急に大きい通りへ出た。

「これから市場へ出る道です。M老人の出してゐる、FUJI料理店へ案内します。」

右に折れて十歩、入口の硝子に拙い富士山を畫いた、粗末な扉を開けて這入る。四角に區切つた白木の賣臺、黒い御客で一杯である。空いた椅子に私に腰をおろさすと、Dは直ぐ奥の料理

場へ這入つて行つた。間もなく、白い帽子を冠つた、大黒様のやうに肥つた人のよささうな、背の低い老人と出て来たD、

「これがM老人で、」

と、紹介すれば、

「やあ、初めて。俺、Mです。よう来てくんすつた。ゆつくり遊んで下せい、御馳走しませあ、なあDさん、蒸鶏え、だらう。酒もありませあ、はあ。」

と、鏡餅みたいな、でつかい柔かい手で私の手を握つた。埼玉縣だと云ふがなるほど、人のい老人だ。其處へ、可愛い、十七八の白人娘が二つの氷水のコップを持つて来た。するとD

「親父さん、素晴らしいのを雇入したね。」

「ウム、白人そつくりだらう。」

老人は、得意さうに笑ひ乍ら奥へ消へた。

「混血兒ですよ。綺麗でせう。」

間もなく私達は、老人自慢の鶏の丸焼に満腹し、少し澁かつたが、手製のビールに酔つばら

つて、外へ出たはもう九時過ぎ、人のい、老人を説いて、Dは、その白人そつくりな給仕娘を連れ出した。やがて三人で、市場前の貸自動車屋の車庫から、オークランドの新臺を出した。

「中央公園から、ライス大學邊へ」

彼女ギルタの申出を、

「オーライ。」

Dは、元氣よくフロントシートに飛び乗つた。

やがて、私は、中央公園の、サム、ヒューストンの銅像前を過ぎ、廣いゴルフリングの松原を馳せ、ライス大學の蹴球場裏を廻つた。

「何か呑もう」

其處で、私達は其處の飲物屋臺から、アイスクリームを買つて喰べた。

「今夜はとても愉快したば。」

私と並んだギルタは小さい聲で、耳元に私語いた。

「だけれど、ミスターD、嫌な男ね、白人種そつくりね、妾は正しい英語を使ふ人が好き。」

車は、再び、主要街の明るい巷へ歸つて来た。

「では、お送りしますかね。」

私達の車は、ホテル、ウイリアム、ベンの前に止められた。

「さよなら、又、遊びに来て下さいね。」

彼女は、私の手を堅く握つて振つた。

翌日。

メトロポリタンの活動を見に行くべく誘ひに来たD、

「彼奴、意外な奴でしてね。いやはや飛んだ目に逢ひましたよ。ありつたけの二十弗にゴードの徽章まで與へて氣嫌をとつてやつたのに、便所へ行くと云つたきり、歸つて来ないんです。そいつが、七十仙の室と來てゐるんですから、堅いスプリングなしの寢臺で、此の通り、一晩中南京虫と戦つて、結局、今日は學校も休んだやうな始末です。」と腕の紅い腫れ上つたのを示した。

「ヘーツ。それで、M老人の家へ行つたんですか。」

美人選抜競技

ここは、テキサス州のギヤルベストンの海水浴場。

毎年夏期に入ると全米の美人選抜競技で、ヤンキー達をうならせる。

今年も、大統領の改選で、民主黨からミスが候補として立ち、その黨大會がヒューストン市で開催されたので物凄い人氣である。

各州から選出の美人は、その容貌、肌、脚、姿態を精細に審査され、それに依つて投票選定されるのであるが、各州の代表美人は、夫々州の名を名乗る榮譽を持つ。

「勿論、今朝、夜が明けると富士へ行きましたがね。昨夜の内に、あの女、暇をとつて出て行つたと、老人が笑つてゐるんでせう。届けると云つたつて、俺が誘つてホテルへ引張込んだから自業自得です。全く癪に障る黒人だッ」

D先生、吐き出すやうに云つて唇を噛んだ。い、態だ。なまじ、メリケン氣取りで、色男がりまんまと助平根性を叩き潰されたと思ふと、暫らく微笑を禁ぜられなかつた。

海岸に押し寄せる數萬の群衆の中を、花環に飾られた車上に立つて海水着の上に、肩から斜にかけた肩章に夫々州又は市の名、例へば「キヤリフォルニア嬢」又は「シカゴ嬢」等、等と現はした美人達、群衆の喚聲と拍手に送られてゆく壯觀、勾欄の極みである。

賭好きなヤンキーの男達は、砂の上に寝ころんで選抜結果の賭をやる。活動屋は盛んにカメラを移動する。飲物屋の屋臺が忽ち、品切れになり、エスキモーパイ屋が、成金になりさう、ヘン妾達だつてと、メリンス友誼のハッピーコートを脱いで、その張ち切れさうな大股を露はに、薄い海水着の娘達が、當選美人の向ふを張つて、水の上に砂の上に、男達の腫を誘惑する。

ブカブカドン／＼見世物小屋が客を呼ぶ。メリーゴーラウンドが廻る。木馬が踊る。射的の爆發、サンドウキツチスタンドの小僧が目を廻す。自動車の洪水、遊空飛行機が五分間一封一仙で客を空中に上げるに急がしい。

祭だ、天氣だ。物凄い帽子の波——。

その混雜の海岸を去つて船の着く波止場に行く、邦人A氏經營の支那料理店に這入る。親方のA氏が話して呉れる。

「勿論、堅い立派な家庭の娘もりますが、たいてい怪しいもんですな、選に漏れたのや、オーブン競技の方の當選者なんて來たら、たいてい、それらしいんです。さうですね。中にはシカゴやヨルクなどの百萬長者など千弗、二千弗出すさうです。ヒューストンの活動小屋なんかに出る所謂ギャルベストン海水浴嬢なんてのは五弗O、Kと來てゐます。ハア……一つ案内しませうか。」

親方に聞いて直ぐ裏の狭いメキシカン街らしいのを行く、暗い二階の窓から白い顔が出て、盛んにハローを浴びせる、せめて夜だつたらと思ふ。

カン／＼と陽は頭上にくるめいて潮の香がむつと鼻を衝く、異國的な情緒深い港街ではある。

花 模 樣 三 人 娘

合衆國の南部ジョージア州の首都アトランタは山上の街で夏期は紐育邊の金持が避暑に來るほど涼しい處だが、日本人と云つては十名も居ない。この街の賑華街のアラゴンホテルに泊つて遂その前で支那料理店を開いてゐる同胞A氏の御世話で、市中見物等大變便宜を得た。毎日、

特に私の爲めに日本食を料理して呉れるので、食事時間になると出掛けて行つた。此處へよく来る『キヤナダの叔父さん』と云ふ面白い人が居る。

「キヤナダの叔父さん」は、十六の時に日本を出て、西伯利亞から歐洲を漂泊し、キヤナダに渡つて来て以來、三十有餘年、放浪生活をつけた運命兒である。今は、此市の百萬長者の邸で庭園帥として働いてゐるが。

「何時になつても、金は握れません、あつしは生涯、世界の旅人なんでせう。」
と斷念めてゐる。此の老人、大の酒好きで、何時もポケットに酒瓶を忍ばせてゐて、食事の際には、

『一つ如何』

と進める。或日此の老人につれられて、セントラル公園の裏街の名物『三人娘の酒場』見物に出掛けた。酒場と云つても公然と酒を賣るのではないが三人の娘——三つ兒の兄弟で、身丈と云ひ、顔と云ひ、寸分違ひないと云ふ世にも、よく似た三人娘である——を相手に竊かに、密造のビールや、葡萄酒を飲むのである。リリーとローズとヅキオレットと三つの花の名を持つ

た金髪の美しい十八娘三人は、私達二人を取圍んで、先づダンスをやつた。運ばれた酒を皆して飲と、私に各自の名を記憶させ、一同出て行つて、一人宛で這入つて来て、私に其の名を呼ばせる。だが、斯う一人宛になると、誰やら、さつぱり判らない。數回試みたが、殆んど失敗した。

「ハ……、あつしだつて見分けはつきませんよ。だが此の娘だけは區別がつかます、耳の下にそら小さな黒子があるでせう。」

『キヤナダの叔父さん』はローズの左の耳の下を指して云つた。

『遊びに来て姉、遊んで二度目に來た時見分けがつかず妹の方と間違へた客が随分あるさうです。あつしは何時でしたか酔つぱらつて三人一緒に雜魚寢をやつたことがありましたかね。それも姉妹別に喧嘩もしませんでした。さう云ふ處が、毛唐と日本人と違ふ處でせう。』

私達は、間もなく其處を出て『キヤナダの叔父さん』の云ふまゝに、ユニオン停車場附近の魔窟へ出掛けた。暗い石段を降りて行くと、むつと異様な匂ひが鼻をつく。蒸々とした地下室である。ゴルキーやアーツバセフの作品に在るやうな地下の酒場で、煤けた洋燈の光りの下の粗末

な卓を圍んで、「地下鐵サム」の兄弟みたいな髯むしやが四五人ホーカーをやつてゐる。髪をくしやくしやにした猶太の老人が、大きなパイプで安煙草を吸ひ乍ら、私達を奥へ案内して呉れる。

「どうです。物凄いでせう。夜になつて御覽なさい。とても繁昌しますよ。………親翁さん、雌鶏はゐないかい。」

洋燈を卓の上に置いた老翁に向つて、「キヤナダの叔父さんは」云つた。

「へエー、もうそろ／＼やつて來ませう」

そこで私達は、又濼い酒を、大きな骨のまの豚揚を肴に飲み始めた。間もなく、三四人の女達が、がやく／＼と話し乍ら這入つて來た。斯んな處で稼ぐ女としては割合に小さつぱりとした形體をしてゐる。その内の一人は顔馴染と見えて私達を見ると、直ぐやつて來ていきなり「キヤナダの叔父さん」の膝の上へ乗つた。

「よし／＼可愛い、赤ん坊」

小父さんは、抱きながらニコ／＼した。

「此奴等は、皆、街路稼ぎですが、疲れると此處へ遠征して來るのです。つまり息抜きと云つた具合にですね、勿論、い、鴨を掴へたら離しませんよ。此處にも此奴等のために、そら、向ふを御覽なさい、あの部屋がそれなんです。」

やがて、私達は、その拙い酒と、女達の淫らな唄とにい、加減酔つぱらつて、再び地上に出た。もう街はすっかり夜の暮に鎖されて停車場は明るく灯に輝いてゐた。

キヨウトを慕ふ女

「妾、日本に居ました。神戸、大阪、京都、エ、東京も日光も知つてゐます。」

此處はミヅシツピー河の河口ニユーオルレアンスの海岸街のホテルの一室、エルダは、その美しい黒髪を、両手でそつと後になでつけ乍ら熱心に語り始めた。正直の處、私の米大陸の旅行中、斯うした倫落の女の中で、日本國を知つてと云ふ者には一人も出逢はなかつた。それ處かよく「支那人か」と問はれて、其の度毎に軽い幻滅を感じたものであつた。離舞數千里の異國の空で、思掛けなくも、日本を語る戯女に逢ふと云ふは、何んと云ふロマンチックな事だらう。私は

染々、機會と云ふものが思ひもかけぬ愉快をもたらすことを感じた。

彼女の語る處に依ると、彼女は西班牙に生れた。十九の春、佛蘭西の若き外交官と結婚し、二十三の時、夫と共に、櫻咲く憧れの日本に行つた。夫は神戸駐在の領事館勤めをして約四年間、幸福な日に彼等は恵れてゐたが、不幸と云ふものは時を選ばず來る者である。夫はその悪戯、神の犠牲となつて、突然他界した。本國に歸る筈であつた彼女は、神戸にゐた、亞米利加商人の甘言に乗せられ再婚した。さうして二人は、間もなく、加州の男の實家へ歸つて行つたが、男にはお定まりの妻子が待つてゐた。彼女は、當然男と別れなければならなかつた。食に飢えた女の辿る道は洋の東西を問はず只一つある。彼女もその一人として、流れ流れてニューオルレアンスに來たのであつた。此のニューオルレアンスは元佛領であつた關係から、今でも殆んど佛蘭西系の市民である。彼女は、若き日の巴里生活の思出をなつかしみ、華かな佛蘭西外交官の妻としての在りし日を忍ぶ心から、此のニューオルレアンスに足を止めたのである。ありふれた悲劇映畫のストーリーに過ぎない経歴ではあるが丁度紐育で觀た映畫、歐洲大戰餘聞の太行列の感激の未だ頭から去らない私には、何んだか身につまされて、ほろりとした。



京都市女ふ墓主人公

「日本には丁度大正十二年から十五年迄ゐました。東京の震災！よく知つてゐます。妾達は神戸に住んでゐましたが、よくキヨウトへ行きました。ナラも妾は好きです。櫻のさく頃のキヨウトの思出は今に忘れません。ギオン、キヨミズなど……もう再び訪れられないでせう。妾、澤山に日本のキモノや人形を持つてゐました。然し今は一枚もありません。記念として残つてゐるのはこれだけです。」

エルダは机の引出から一冊の古びた寫眞帖を取出して私の前に置いた。それには、彼女が夫と共に、清水や、金閣寺などで撮つたのや、派手な友誼模様の振袖を着けて日傘をさしてゐる姿

どが一杯に張つてあつた。

「さういふ、コーヒーでもわかしませうね。」

涙の目を拭ふとエルダは思ひ出したやうに立ち上つていそぐと外へ出て行つた。窓の下を過ぎてゆく小蒸汽の汽笛が寂しく夜更けの港の空に響いた。

船 中 奇 譚

P、H、Dワールレスと云ふ五十餘りの赤ら顔の、さうだ獨逸系亞米利加の老紳士で、何時もボケツトに右手を突込んで考へ乍ら歩いてゐるのだが、P、H、Dと云へば、亞米利加の最高學位ですから立派な學者に違ひないんだ。ところが或る晩、此の謹嚴そのもの、やうなP、H、D先生が、田村と云ふ娘さん——神戸の〇〇學院の優等生で、ミゾリー州のなんと云ふミツシヨンスクールへ留學の爲めに行くといふ二十餘りの丸顔の可愛い、顔をしてゐた——に甲板の暗がりて接吻をしたと云ふのだ。勿論その田村嬢——斷つて置くが之れからも人名だけは假名にする——が悦んでそれに甘んじてゐたら何も噂にならなかつたのだが、嫌だつと、見事その河馬の

唇から脱れて、自分の船室へ歸ると、同室の井上女史——加州のオークランドで日本婦人會幹事をやつてゐる鼻眼鏡の恐ろしい顔した婆さんだ——に告げたから大變だ。名譽ある婦人會幹事は、黒いドレスの腕をまくり上げて、得意の流暢な英語で以つてP、H、D先生をやりこめたまではない、が、さて此の田村嬢、實は香港から市俄古に歸るノースウエスタン大學生と稱するセラーパンの美少年と、毎晩ダンスの歸りに艙の暗がりのベンチで、日本では當然鉄を入れられる映畫の一情景をやつてゐたと云ふから皮肉である。

井田の奥さんは私達の卓友達だ、白百合のやうな清楚な美しい人で、羊のやうに優しく、見た處未だ二十三四位かと思はれるほど若い奥さんである。三十五歳になるまで十二年も、海外に居る夫の留守を待つてゐたが、今度、紐育の〇〇銀行詰になつた夫から呼ばれて行くのださうである。食堂で同じテーブルで食事を共にする時、テーブルマスターの機關長から「どうです奥さん、少しはお話になつたら。」とその度愛想よく話かけるのだが。

「妾、無愛想者ですから。」

の一點張りだ。甲板で皆が遊戯に興じてゐる時でも船室で婦人雜誌を読み耽けつてゐると云つた

具合。『どうもあの奥さんは内氣だね。今時珍らしい舊型の女だ。何しろあんな調子で十二年も外國で頬ベタの赤い女に夢中になつてゐる亭主を待つてゐたんだから。』と口の悪い宮本ドクターは皮肉つたものだ。だが、此貞淑にして無口の典型的な良妻井田の奥さんが、とんだ喰はせ者だつたことである。と、云ふのはある晩、お茶を持つて來たボーイがにや／＼笑ひ乍ら話すところに依ると、之の井田の奥さんの室へ毎晩一人の男が行つて泊るんださうである。彼女の室はA甲板の右舷側の一人室で、夜は餘り人の通らない處だ。擔當のボーイが夜の造床に行く時、何時も堅く錠がかか／＼つていて、聲をかけると、

『今晚はもう結構。』

と内から優しい奥さんの聲、内にはどうも確か二人の人間のけはいなさうで。その相手の男が、どうやら大田と云ふ、紐育の〇〇會社支店に行く男らしい。さう云へば、私達が食堂の卓に就いた時、一つ置いて向ふの卓に居る色の白い、キザな若い男が時々妙に嫉妬めいた眼で、何物かを監視してゐるやうであつた。

『あの奥さんあれで煙草も吸ますよ、室にゐる時は黒襦子の襟の羽織を着けたりしてね。長

い羅宇烟管ですば／＼やつてゐる處はそれ者上りとしか見えませんね。酒も飲むと見えて、ホイスキーの瓶も棚に置いてゐます。ダンスは嫌ひだが、三味せんなら弾くさうです。虫も殺さぬやうな顔してあれでさあ、實際給仕なんかしてゐると嫌になりますよ。』

と、美しい眉をしかめて、ボーイの村尾は、いま／＼しさうに語つた。有島武郎の『ある女の生涯』みたいな事件は船の中では珍らしい事件でないらしい。

私の隣の十號の室には、夫婦者の亞米利加人がゐた。横濱に在る亞米利加の某會社支店の技師と稱し、かなり日本語も巧みであつた。或る夜娛樂室の麻雀から歸つた私は、室の前でその技師君が、彼の妻でない若い美しい女——布哇から乗つた三人連れの舞踊家と稱した中の一人と——腕を組んで彼の室へ這入るのに出喰はしました。

『ドウです。この人キレーでせう。』

と彼は少し酔ばらつた口調の日本語で云つた。變だなあと思つて翌朝顔を洗ひに行く時聞いたドアから覗くと、彼等夫妻は、もうちやんと行儀よく椅子に腰をおろしてむつまじくコーヒーを飲んでゐた。

「何、彼奴等もやつぱり船の中を稼ぐ女ですよ。妻君ですか、遅く迄踊つて、あの頭の禿けた石油會社の支配人とか云ふ男と酒場で飲んでましたよ。大方妻君も、あの禿翁の室へ行つたんでせうよ。」

とはロサンゼルスに二十年も住む宮本ドクターが云つた。

治外法權の船の中の罪惡は全く船の中で醸され船の中だけに秘められ、永遠に大海の神秘と同じやうに、美くしいロマンスとして消えゆくものかも知れない。これは後に伯林で友人Kに逢つた時、彼の告白だが、同船したある有夫の美容師と懇ろになりマルセユー迄夫婦のやうな生活をして巴里で別れたが、その後噂に聞くと女は妊娠して困つてゐるさうだ。然し僕の子供であるかどうかと、他人の話でもしてゐるやうな口調で笑つた。

井田の奥さんにした處で、船が桑港の波止場に着いた時、迎いに出てゐた彼女の主人に

「まあ貴郎」

と、もしほらしい風情で抱きつき、潜々と泣いたほどである。斯うなると全く何が何やらさつぱり、譯が判らなくなる次第だ。

S君

實際、素晴らしいと云ふより寧ろ物凄いな國だね。日本で君から聞いた時は何時もなかに、座談上手の君だから、七分迄は創作さ——とばかり思つてゐるものだが、船へ見送りに來て呉れたT先生が、

「これは、桑港に着いてから開けて見るんだよ」

と船室の棚の上に置いて呉れた小さい紙包みを、出帆すると直ぐ開けて見た僕は、町寧に三重三重と包まれた心臟形の箱から、佛蘭西製らしい精巧な密書で色彩られた淡紅色の護謨風船狀のものをつまみ上げて思はず、微笑を禁じなかつた。それがあの「外遊歸朝後、結婚した妻に依つて初めて陥ちた彼の童貞」と、噂さされる謹嚴石の如き老大學教授の饒別だとすると、君の所

She is Coloured, You know,

——ある外國觀察者の手紙——

A

謂「外國旅行者の必然成さなければならぬ體驗」なるものがやうやく、判りかけて来たやうだつた。事實来て見ると、あの聞いてゐて自然、口腔の中が粘つくくなる君の話が偽りなき現實であり。君が一個のエロテックな話術家でないことを斷然證明した譯だ。

船の中で食堂と云はず、娯樂室と云はず世界の旅の先輩達——彼等はとほうもない不良老年達である。——の各國女の噂話で、何時も賞讃せられるは、「黒人女の特異性」であつた。が、さてあの沃度丁幾を塗つて日當りに乾した蛙の背みたいな顔の色、乾いた塗用刷毛みだいな粘りついた髪、そり返つた部厚な唇。——實際あのリノリム色の腕が汗で濡れてゐるのを見ると何處か南洋邊の沼の邊で、強烈な太陽の光りを反射する鰐魚の背を想像する——と云つたものを眼の前にする時は、武者震ひは何時の間にか風邪ひきの晩のやうな、胴震ひに變つた次第であつた。

B

綿と米で名高いテキサスで、邦人石油王として知られてゐるK氏を訪ねた僕は、オレンヂ村の

氏經營の油田や、ボートアーサー精油場等の視察を終り、ヒューストン市で一週間餘り滞在する事になつた。同市は毎年夏になると、美人投票競技會で有名な海水浴場であり、一つには古くからの開港場で知られた、ギヤルベストンを控へ、綿米の集散地として、殊に近年は附近の島と云はず、林と云はず出鱈目にほん／＼石油が噴き出す爲めに、俄かに繁榮した街で素晴らしい加速で街は擴がり、四十階五十階の摩天樓が無制限に林立されて行き、カーボーイ氣質の抜け切れない土地子がパチンと指を鳴らして「南部紐育でさあ、」とうそぶく、明るい近代都市である。だが、北部と違つて南北戦争の餘弊未だ冷めずとも云はふか、黒人は絶對的奴隷視されてゐる。

彼等は街の郊外の一角に住居し、斷じて白人と雑居を許されてゐない。列車は彼等の爲めに設けられた三等車で、二等車等には乗る事が出来ない。停車場には必ず「Coloured」と「Whites」の二つの待合室があり劇場、教會、公會堂は勿論のこと、大百貨店だの、一流のカフェー、料理店の出入は禁ぜられてゐるのだ。只、乗物では市内電車だけ辛ふじて白人と同車出来るが、これとても、「白人は前昇降口より、而して前から後へ座席をとり、黒人は後昇降口より、而して後

から前に座席すべし」と運轉臺の上に、でつかい注意書が掲げられてゐる。だから白人は彼等を犬猫と同視し、黒人は白人と言葉を交はすことさへ、身に餘る光榮だと思つてゐると云つた、デモクラシーの本家本元としては、まことに矛盾した土地である。意外に話がそれて飛んだヒューストン紹介になつたが、さて本題に入らう。

その晩は北端街の市場に集つまた郊外の邦人百姓さん達に招待されて市場街の餘り上等でないが、彼等の行きつけで素的に巧い七面鳥料理を喰はすと云ふメキシカン料理店で御馳走になり、御茶だと云つて注れた、コーヒー茶碗の澁苦いビールとブランデーの變なコクテルに散々酔つぱらつて、外へ出たはもう一時過ぎ、送つてやろうと、親切に云つて呉れた百姓さん達の自動車がどれもこれも二十三年型のフォードに、いさ、か怖氣を抱いたものだから反つて風に吹かれた方が結構ですと、無理に斷つて、こつくと煉瓦の磨り凹んだ暗い狭い歩道を、市會議事堂の四角な時計臺を目當てに歩いて行つたものだ。

南部と云つても、もう十一月だ。殊に猫の眼のやうに變る大陸的氣候だから、晝間の暖さから急に霜の降りさうな冷えの激しい夜に變る。外套をつけぬ僕であつたが、腹の中のアルコール

の燃焼で、反つてその冷い風に氣持をよくし、うろ覚えの「ラマナ」かなにかを口笛じやり乍ら遠い空の霧の中に明滅する、ライスビルディングの塔の灯を仰いで、嫌に感傷的な詩興を感じたとても云つた譯さ。

だが、此邊一體、下級労働者の住家だから宵の口だつて明るい方ではなく、斯う夜更けては人通りなど絶無と云つていゝ。三区も歩いたと思ふ四つ辻を過ぎる時、ふと、向ふ側の空地に建てられた廣告看板の下にしよんほり立つた赤い帽子を見た僕は、

「今晚は、寒いですね。」

とつい聲をかけてしまつた。無論、僕は「客待つ女」だと思つたからだが、七分迄は酒がそれを云はしたに違ひない。ちらと、帽子が動いて顔を上げたやうであつたが、別に答へやうともしない。違つたかな、だが、もとより意味あつての事でないのだから、そのまゝ僕は通り過ぎた。そうして間もなく市役所の嚴しい石門前に出た。すると後からかくくと急ぎ脚の靴音がして、彼女は僕に追付くと矢庭に右腕にからみついて、息を喘せ乍ら云つた。

「妾の爲めに何處か旅館へ行つて呉れない。」

強烈な腋臭の匂ひを一杯に吸ひ込んだ鼻先へ突出された顔に、

「呀ッ」

と不覺にも僕は奇聲を發して仕舞つた。何んと赤い帽子の下では眞白い齒ばかりが、無氣味に笑つてゐるではないか。だが次の瞬間「機會だッ」と心に叫んだ僕は元氣に答へた。

【Oil right go a head】

女は手を舉げて、タキシードを呼んだ。

C

車は、夜更けの裏町を幾曲りHOTELとたてに書いた電氣看板の家の小暗い軒に止つた。とつづきの階段をぎし／＼音さして上ると、ぶく／＼の黒い顔した婆が、磯ぎんちやくみみたいな紫色の唇に愛嬌を含ませて、先に立つて案内する。青ペンキの剝けた荒板の扉を開けて、入れられたのが、又、世にも粗末な冷々した室である。四圍高さ十呎ばかりの荒板の壁で圍まれ、(映畫のセットだつて、こんな簡單なものぢやない。)室の電燈の明りが、微かにも届くところ、天井の棟木や、鐵のポルトが、いみじくも蜘蛛の巣で被はれ、がらんと寒い八疊敷位な室の真中

に置かれた、古風な木製の一人寢臺、右の隅に汚いアルミの洗面器と、白エナメル塗の水さし。うら寂しくも置かれた外何んの裝飾もない。不幸にして未だ米國どころか、日本の木賃宿にさへ泊つた經驗を持たぬ僕としてはこの總てが驚異であり、憐れにうら悲しく思はれた。だが、寢臺の上の敷布と、掛けられた手拭だけが、きちんと張つた洗濯物であるだけが、せめてもの心安さだと云へば云はれる。虎穴に入らずんば何んとやらと、もう何もかも斷念めて、さて、置かれた竹の椅子に腰をおろすと、今更染々と灯の下で彼女を見たものだ。

いかさま、色こそチヨコレイト色だが、唇も普通だし、細長い顔に眼、鼻の調和もとれ、帽子を脱ぐと斷髮の黒い房々した髪をしてゐて、黒人としては餘程陶汰され、進化した方である。河瀬らしい毛皮の襟の黒い外套の下に着けた濃綠色のドレス、肉色の絹沓下と云ふ装ひは、亦左程貧しい女とも見えない。

「だつて錠を紛失して入口の戸が開かず、一時間以上も、あの寒い風の中に立つてゐたんですもの。だが、あんな風に聲をかけたら、そんな女でも思はれるかも知れないはね。」
彼女は極力、自分が夜の街を彷徨する女でない事を辯解した。なるほど、翌朝、一文の報酬

も要求せないし、又再び逢ふとも云はず、寧ろ感謝を繰り返して、あつざりと別れたところを見たと、それが、眞實らしくも思はれた次第だ。

で、まあ斯う云つた因念で、僕も世界的何んとかの讃仰者の資格を得た譯だが、どうも僕として、いささか腑に落ちぬところがあつた。否、腑に落ちぬも道理、これがいやはや飛んでもない思違ひであつたのだ。

と云ふのは、それから三日目、U君——K氏の秘書をしてゐる——に案内されて、ライス大學と、AM工科大学の蹴球見物の歸りの電車の中から乗替の南端街で、計らずも彼女が、僕達と反對に行く電車に乗るのを見たのに、當然、車の後昇降口から乗るであらう彼女が悠々と、白人専用の前昇降口を上り、おまけに最前の空席に腰を下ろして、すましこんだのは、僕たるもの、どしんと、後頭部を撲られたやうな驚愕を感じずに居られなかつた次第だ。

それに、U君が平氣で説明したものだ。

「メキですよ。なるほど、あいつは圖抜けて黒いですね。あれ何黒かつたら夜など、黒人に見えますと。」

欠

欠

料水の發達も確に「世界に於ける亞米利第一」の一ツとして認めてやらねばなりません。餘談だが歐羅巴では、自由に飲酒の出来る結果が一般飲料水としては日本のシトロンサイダー類位な程度で、ミネラル水と云ふ味のない礦泉を瓶詰で賣つてゐると云つた貧弱さだ。倫敦や巴里のカフェー等によく、アイスクリームを注文して「亞米利加から來たね」と笑はれたものである。

處で、かほど飲料水が發達してゐる亞米利加では、酒は飲まないかと云ふと、どうして〜彼等は、酒に不自由——結局、賣る店がないから買へないと云ふ——があるだけで盛に飲んでゐる。個人の家では必らず、ビールとか、葡萄酒を密造してゐて、晩酌位には不自由しません。藥屋ではちやんと調合するやうに別々に藥品として賣つて呉れる。醫者の處方箋さへ持つて行つたら素晴らしいホイスキーでもブランデーでも飲める。ローサンゼルスに日本字新聞、日米の廣告欄などには、「酒の素、新麵賣出し」とか「麥酒の原料新發賣」なんて麗々しい廣告が賑はつてゐる仕末だ。「酒を飲ます家」は至る處にあつて、前記の魔窟の他に、よく郊外の一軒家など殊にゴルフリンクなどの附近にあるバンガロー建の家で、一杯何弗なんて恐ろしく高價な獨逸製の酒を飲ます家があり。市俄古の四十何街の裏通りには「ドリンク」と赤い旗を立てた酒場があり

ます。戸口にバグダットの盗賊みたいな物凄いいん貴が、タイヤみたいな兩腕を露して柱にもたれて、マドロスパイプから吸ひ込んだ煙を。ライオンみたいな鼻から、湯屋の煙突みたいに吐き出し乍ら見張つてゐる。街の角の電柱や、ポストの影に投げ捨てられたホイスキーの空瓶の多い事多い事、主要街で、よく人の群がつてゐるのは、日本だつたら喧嘩と云ふ處だが、たいてい酔つぱらひが巡查を手古づらせてゐる事件である。

船から密輸入するのは當然だが、近來は飛行機で空から輸入する。キヤナダから酒を輸入してゐた男は自動車のタイヤに一杯詰めて巧みに其筋の眼を脱れてゐたなどと云ふのがある。要するに法律の禁酒國は實際に於て飲酒國に他ならない亞米利加の今日である。

特製痰唾燐肉

「オイ、君、何んでもい、から食べさせて呉れ。」

何んとお恥かしい話だが、是れが、桑港の波止場で迎ひに出て呉れた友人のWに一番最初云つた挨拶だから、今から考へても餘程腹を減してゐたと思はれる。

さもし根性な奴だな。船の中で食はずに太平洋の二週間を過したかイ——とでも、きつと嘲笑られる處だが吾が友Wは幸にして紳士として立派にカラーにタイを着け、磨いた靴をはいてゐるから、そんな事は斷じて云はない。さてよ、奴は平民だつたけ、素町人などに「武士は喰はねど云々」の心持はないかも知れない。之れでも私の祖先は源何んとか云ふ大和郡山の城主、録高六萬石の殿様だ。系圖は立派だが、戦に破れて落ちる時、胡瓜畑で馬が蔓に脚を引かけて落馬し首を取られ、それ以來二十數代の吾々に迄、胡瓜禁食の家憲を嚴守させるほどの有難くない弱虫殿様だ。だから、その後裔などが、千代萩の鶴千代君みたいな總明で、忍耐力のある者でない事は保證出来る譯だ。だが一體、何んでそんなに腹を減らしたイと後で紳士らしくWが問ふたが、いやはや、實に馬鹿けた話で思出して癪だ。

船が港口で止められて、検査を受けるのが朝の八時だつた。柿色の服を着け、十能みみたいな、でつかい手に靴を提げた——笑ひと云ふものはクリストの生誕以來、此の地上から消えて仕舞つたと云つたやうな澁面の而かも滑稽に近いほど傲慢な態度の移民官の前に座されて其の横にきりぎりすの化物みたいな鼻眼鏡の老婆が針金のやうな指を痙攣させ乍ら、

「アナタ、ウシヨ云つてはいけまぢえん。ホントのこと云ひます。」
と通譯し乍ら訊問するのだ。一通り聞き終ると

「カナタ、ツカヒナシヤイ」

と婆が口をへの字に曲けて云ふが、ツカヒると云ふ意味が解らない。多分頭を下けろだらうと思つてベヨコンと叮嚀に御辭儀をしたが。

「そうでない、手上げなしやい、ツカヒなさい」

と來た。ハア……誓ひと云ふ意味かと手を上げた。だが、それで許された譯ではない。それから三度呼び出され、三度目にやつと正金銀行の小切手を見せて上陸許可となつたが、斯うなると帝國外務大臣田中義一閣下の「……に赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且ツ必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレム事ヲ其ノ筋ノ諸官ニ希望ス」なんて書かれた菊花の紋の付いた旅券も、駐日亞米利加領事の證明書も三文の値打もない譯だ。朝の八時から待たされる事七時間、やつと税關の荷物検査を終つて、亞米利加の土を踏んだは午後四後前、勿論、お晝の食事は船で出したのだが、不安で誰も喰べやうとした元氣者は一人もなかつた。

で、先づWに連れられて、マーケット街のとある料理店に這入つて行つた。何を喰ふかと料理表を示されてごちくやと品數の多いのより一品で大量のがいと思つたから特別燻肉と欄外に在つた奴を注文した。だが運ばれたのを見た時は流石にギョツとした。第一番の大皿にのつけられた茶盆みたいなでつかい肉で、その約三分の一が骨、三分の一が白い脂肪、残りが眞赤な血の適る肉だ。腹は減つてゐるし、いきなり喰べ始めたが、何がさて、日本で食べる、五六人前もあらうと云ふ奴だから半分も喰べ切らない内に満腹した。コーヒーを飲みながら見てゐたWは氣味の悪いほどにやく／＼笑つてゐる。眼を白黒さして喉のところ迄つかへるほど俄慢して喰つたが、う／＼三分の一は残つた。

「流石に喰べ盡さなかつたね。あれは君、一卓四五人のパーティーで注文する特別な品だよ。だつて、君が勝手に注文したから注意する譯にはいかなかつたよ。」

と外へ出てからWが云つた。道理で、でつかいに違ひない。

亞米利加の土地を踏んで、先づ最初の赤毛布は、實に此の仁王様の掌みたいな特大骨付ステーキの失敗である。

が、此の燔肉では今一ツ私に思出がある。

チヨージヤナ州の首府、アトランタ市の支那料理店で給仕をしてゐた私——Yと云ふ日本人で早稲田の商科を出た男が親方をやつてゐて、よく世話をして呉れて毎日日本食を御馳走して呉れたので、御禮に夜は他の日本人學生と同じく三四時間給仕の助手をやつてゐた時の事である。だから勿論、私は他の學生のやうに給料を貰つた譯ではない。すこぶる自由な給仕で、氣が向かなかつたら勝手に街のカブエーや、活動に出掛けられる身分だつた。

或る暑い晩だつた。餘り風采のよくない五人の男客の注文に應じて、例の特別燔肉と云ふ奴を運んだ新米給仕の私に鼻の先きの曲つた痺せた客の一人、

「オイ、君、之れが此の看板通りの美味類なき燔肉と云ふのカエ、之れがね。」
と・ホークの先きで肉をつつき乍ら云つたものだ。

「イエース、如何です。即ち看板の如く、もしも貴方達が再び御來店の節は第一番に御注文なさるであらう——とこの常店特製自慢の板前でさあ。」

と私は、少し反り身になつて赤と青とで、Y親方が得意の右上りの文字で書いた壁の廣告に指

さした。

「ガツデム、斯んな肉が喰べられるか。」

「さうだ。さうだとも、第一鹽が辛いや、それに冷え切つてゐて、とても喰へたもんぢやねえ。」

「一體之れあ今朝にでも揚げた代物だらう。」

五人が口々に罵り始めた。

「交換して来いッ。看板が聞いてあきれらあ。」

皿を私に突出した。糞ッ、何んて汚い口を利く奴だらう。欲しくなかつたら止せやいと餘程のところを皿を叩きつけてやらうと思つたが、他の卓にも一杯の御客だし、客稼業の弱さ、唇を噛みしめながら皿を両手に、兎も角料理場へ這入つて行つた。

「何んだツて、冷いつて、鹽辛いつて、さうだ違ひない、少し醬油が利き過ぎてゐるし、おまけに揚げて三十分もした奴だから熱くはないさ。第一奴等は床屋の兄貴達で、此の店なんかに来る柄ぢやない。K君が床屋だと云ふから態と再び來ぬ様に之れを出したんだよ。だがい、そん

な生意氣云ふなら斯うして再び揚げてやるさ。」

白いエツブロンの袖を思切り兩方肘に捲くり上げ、丸太棒みたいな黒い腕をし、Y親方、いきなり皿の肉を鍋にうつすと『カツ』と喉から嚙みしめたガムみたいな青淡をばつとその中へ吐くと、鐵製のホークでくしやくくと混ぜまはした。じりくと香ばしい音をたてた肉を、ほいと皿へうつし、

『今度は甘くて熱いぞハ……………』

心得たと私、謹しくそれを再び卓へ運んで、

『今度は御氣に召すでせう。』

と、にやつとすれば、

『素的く、こいつは看板通りさ。』

と、ナイフを執つた床屋の兄貴達。

カーテンの隙から顔を出したY親方と私、思はず眼と眼で笑つた。

『へ……、馬鹿野郎共、痰唾ステークで悦んでるやがる。』

強盗と警官

近代文化の代表だけあつて、犯罪と探偵も流石に進歩した——犯罪なんか進歩せない方がい、んだが——亞米利加だ、そんな事は新聞や雑誌や、映畫で、既に讀者諸君は百も御承知の筈、マツカレーや、ヴァン、ダインのやうな有名の探偵小説作家のコントなどで寧しろ、地下鐵サムなどは、日本には馴染が多いかも知れない。白晝、ブロードウエーのラシユアワアの最中を賊の自動車と警官の自動車が追かけ合つたり、銀行の大金庫が破壊され、殺人が行はれたり、或は、破獄囚人が機關銃で警官や軍隊と戦争ごつこをやつたり、飛行機で犯人を追かける名探偵があつたり、いやもう、斯んな愉快な映畫物語みたいな事件を話してゐたら限らない事だ。

だが、映畫や、探偵小説に出る名探偵は、超人間的な頭腦と約のやうな勇敢な男ですが、事實亞米利加の警察官なんて、お話にならぬ弱蟲で憶病者だ。

市俄古の下宿に居た時、その下宿の向ひの家——佛蘭西人で小さな洗濯屋をしてゐた——へ或晩強盗が這入つた。クリスマス近い寒い晩で、もう十二時を過ぎてゐる頃、下宿の裏口の戸を叩

いてその洗濯家の主人が下宿の女將を起して、ガタ／＼震へ乍ら、今、強盗が四人連れで這入つた。今頃は金庫も破壊されてゐるだらう。金は盗まれてもいゝが、女房や小供達が殺されてはと泣き出したものだ。話を聞いて女將も唇の色を變へる騒ぎだ。牛欄下宿の主人は旅行中なので私を起して直ぐ電話を警察へ掛けて欲しいと云ふのだ。元來なら「よし、俺は日本人だ得意の柔術で一番彼奴等を生捕りにしてやろう」と大きく見得を切りたい處だが、何しろ相手は夫々、鐵砲を持った兇漢、而かも四人と來ては、柔道百段だつて敵はない筈、で遺憾乍ら、いや寧ろ、これ幸ひと、直ちに警察へ電話した。

「何、強盗、無慮十名、なるほど、こいつは大物だな。ウン金庫を破壊してゐる。いや直ぐ出勤する。何、鐵砲を持つてゐる。大丈夫直ぐ行くよ。」

と、威勢のいい返事だ。火事だつと半鐘の音に、すさまじい警笛を鳴らして行くギヤソリンポンプのやうな愉快な返事だ。だが、その返事があつて十分経ても二十分経ても、更に來るけはいがしない。警察から此處迄四十哩のスピードなら十分もかゝらぬ筈であるのにと、泣いてゐる洗濯屋の翁さんを女將と二人で、なだめながら待つたが、なかくやつて來ない。その内、強盗

共は仕事を終つて、そろ／＼自動車を動かし始める様子だ。火を消した二階の私の室から、息をこらして表の通りに動く彼等の姿を見守つてゐた私達は、もう我慢が出來ず、再び警察へ電話した。

「何々、強盗が立去る。アーン。はつきり云ふんだ。もう逃げた。逃げつゝあるのか、よしよし直ぐ行く。」

今度は、如何にも直ぐ來さうだ。暫らくすると、威勢のいい警笛が風に送られて聞えて來た。私達は先づ／＼と胸をなでおろした。次いで暗に響く鋭い銃聲。ボン／＼／＼、銃口から青い火が流れるのが見える。だが、彼等勇敢なる警官達を乗せた自動車が洗濯屋の前に止まつた時にはもう、強盗の自動車は影もなかつた。幸に、洗濯屋の翁さんの杞憂してゐた彼の妻君や小供には、何等危害は加へられなかつたけれど、金庫は見事、ナイトログリスリンで破壊され翁さんの二十數年刻苦精勵の賜物株券も、債券も、現金も、奇麗さつぱりと持つて行かれて仕舞つた。「鐵砲を持つてゐると云つたから直ぐ來なかつたでせう。どうも、警察なんか當てにはなりませぬね。」

とは旅行から歸つた下宿の主人の言葉である。勇敢な警官の話にもう一つ斯んなのがある。紐育の百何番街の角の家の前に澤山の人だかりに丁度通りか、つたS君と私、人の肩越しに見ると、一人の大きな男が三人の警官に依つてトラックに運び込まれるところであつた。夏の黄昏時で、やうやく灯がついたばかりだ。よく見ると、運ばれてゐる男はどうやら死んでゐるらしく胸のあたりは眞赤な血で染まつてゐる。どうしましたと隣りの床屋の下刈りみたいな白い服の男に問ふと、

「あの野郎が、此の猶太人の服屋へ羅沙地を見せて呉つて這入て來たんださうです。あそこにほら、口を尖らして、刑事に何か話してゐるでせう。あれが、此の店の主人です。丁度その時あの主人と、あの小僧とが、もう店を閉めやうと、勘定臺で賣上けを計算してゐたんださうです。いきなり、手を舉げろと短銃を見せたものです。二人は神妙に手を舉げると、直ぐ其處にあつた賣物の革帯で両手を縛し悠々と賣上金の這入つたまゝの、あの金箱を両手で抱へて出やうとした時最前から外で見てゐた、通りが、りの警官、そら、あの主人の横にゐる小さい警官です。此の野郎と狙を定めて、ぶつばなしたのが實に鮮かに彼奴の心臓を撃たのです。御覽なさい、あの飾窓

のガラスが毀れてゐるでせう、窓越しに撃つてよく命中したものですな。」

翌日の朝刊には寫眞入り二段抜きで此のチビの警官の勇敢なる行爲を賞め讃えてゐた。

何が勇敢だ。重い金箱を抱へて出て來る奴を硝子越しに撃つなんて誰だつて出來る話さ。

日本の巡査ならどんな田舎の駐在所詰の者だつて入口に潜んで出て來た利那、組敷いて格闘の後捕縛するだらう。ハ……笑はせやがる。」

Sと私は、朝のトーストを嚙り乍ら笑つたものである。まあざつと斯んな位は勇敢なる亞米利加の査公だ。一體、亞米利加は各州がすべて自治行政な關係から法律も其の州と隣りの州といささか違つてゐるので、種々な繁雜や滑稽が演ぜられる。例へば加州では日本人と亞米利加人との結婚を許されぬ處から之れを許してゐる。隣りの州へ行つて儀式をして歸つて酒々としてゐる日米夫婦がありと思ふと、隣りの州で悪事をした犯人(勿論徵罪だが)がこの州へ來て平氣で生活してゐるなど珍らしくない話だ。田舎で百姓をしてゐる日本人の家でよく、其の客室に、丁度、日本の山國の獵師の家に見るやうに壁に大小四五挺の鐵砲の掛けられてゐるのを見た。

「さうです。警官など當てにならないから、自分達で防衛する他ありません。あの一番大きい

奴が私ので、次のが弟のです。其他家内の小供達と夫々準備して置くのです。彼奴等の襲撃を受けた時、家内中で戦ふ萬一を慮つての事です。いや、冬期には随分ありますよ。メキが一番多い様です。日本のやうな、コン泥的なのはありませんが、それにしても決して窓などから這入りません。窓を破つて他人の家に入つたら、二十年も刑が長くなるんですから。鍵の國のい、處は、戸締りが嚴重だし、もし無断で入口のドアを開けて這入つたとしたら撃つてい、んです。もし之れが物どりの目的でなかつたら日本なら家宅侵入罪位な微罪ですが、此の國では、物どりの目的であろうとあるまいと文句なしに撃つてい、んです。家は云はば自分の城廓ですから、外部から無断で侵入して来た者は誰でも敵と見做してい、譯です。だから、往々間違ひもありますよ。もう三年も前の話ですがギャルベストンの郊外で中林と云ふ男が鈴木と云ふのミセスに撃たれて殺された事件がありました。中林と鈴木は一緒に百姓をやつてゐて親しい友達同志だったので、丁度其日も二人でギャルベストンの市場に、レタスかなんか賣りに行つて二人で愉快に晚餐を撮り別れて各々家に歸つたのですが、その夜鈴木が、急に産氣づいたので、鈴木はミシンで町の産婆を呼びに行くべく、隣りの中林のミセスにその事を告げに行つたのです。

生憎その晩は、夕方頃から猛烈な嵐で、中林のミセスは、主人が町の知人の家へ行つて歸らないのを心配し乍ら縫物かなんかしてゐたさうです。隣りと云つても兩家は二哩も離れてゐます。雨にびつしより濡れた兩外套に帽子を眼深く冠つた男が、ドアを開けて入つた時、中林のミセスはどう見間違へたか、てつきり強盗と、持つてゐた短銃で見事眉間を撃つたのです。過失殺傷として裁判沙汰になつたのですが、結局「ひどい嵐の晩ではあるし、帽子を眼深く冠つて雨に濡れた怪しい男を撃つたのは、正常防衛だ」と云ふので無罪になりました。噂さでは鈴木が兼ねてから中林のミセスに變な素振りをしてゐたと云ひますから、その晩も、何か、さうした痴情關係から、鈴木がミセスが撃つたのだらうなどとも云ひますけれど、然し何んにしても嵐の晩などは他人の家へ、うっかり訪ねられませぬよ。」

日露戦争直後、片山潜氏などと一緒にテキサスに来てもう二十餘年百姓生活をしてゐる東原氏の家で泊つた晩、氏が話した實話談である。

第一二世物語

「君は何國人？」とでも云つたら、

「俺……オフコウス、アメリカン」とめりかんに力を入れて、低い鼻を思ひ切り空に向け、昂然と答へるが次に、

「だが、パパも、ママも、チャップマン。」

馬鹿票の籤に當りそこなつた時のやうな情けない顔をする亞米利加移民第二世物語である。

恐らく日本人にとつて、世界中でこれ位不愉快な人間はゐないだろう。「重大なる結果」と迄叫んで抗議した移民法をさつさと通過させて、太平洋の彼方に浮ぶ假裝國の人間と一も二もなく排斥する亞米利加人へ、個人としては實に親しみ深い人種である。だがこの日系米人と来たら……

黄ろい平たい顔、眞黒な羅沙刷毛みたいな髪、脚の短い、丈の低い、まことに洋服姿の無恰好な……斯う書くと、日本人は型なしたが、實際、歐米の市街では彼等毛唐に比べて癩だけ

ども堂々たる風采とは見えないから仕方がないが——人間であるて、支那人より拙いアクセントの日本語、否、殆んどその八十%は英語しか話せないと言つた妙な人種であると云つて、俺達はちやんと亞米利加の國籍を持つ國民で、立派に星條旗に對して敬虔な念を捧げ、國歌を歌へば帽子を執ると云つても、電車や汽車の中で、乃至公會の場所だつて、別に國籍を證明する勳章をぶらさけてゐる譯でないのだから、決して毛唐達は、「日本人」でないとは思はない。

まあ、そんな事は、どうでもいゝとしてこの日系米人、即ち第二世と云ふ人種の、母國——

彼等に云はすと、兩親の祖國——に對しての嫌惡な觀念と來たら話の他である。日本に對しての智識のない亞米利加人なら、それでいゝ。家庭仕事や、果實採りや、百姓をやつてゐるのが日本人でも、櫻のさく、マウント富士の美しい風景の國だと、仄かな幻影の中に憧憬を持つ彼等である。だが、この第二世と來ては、多少にも日本に對して智識を持つてゐるからいけない。小學校の教科書には「日本」と云ふ題で約一頁半、そのさし繪に、毀れかゝつた藁ぶきの百姓家、その前で手拭で向ふ鉢卷をした小女が、赤ん坊をおぶつて泣き出さうな顔をしてゐる。小川のほとりで、七八ツの男の兒が、蛙に小便を浴びせてゐる國辱的繪を入れて、

「これが、君達の両親の母國だよ」と教師は皮肉に笑つて教へる。家へ歸つて、
「一體、日本には自動車があるか。」
と問へば、両親、顔を見合せて、

「どうだな、TOKYOにはあるだらうよ。だが私達が、此地へ来る時には未だ故郷には、電
燈さへなかつたからな。」

と恥かしさうに答へる、何しろ日清戦役、近くて日露の役より以來日本を知らない彼等の両親で
ある。それも廣島や、和歌山の山の中で、やつと安燈が洋燈に代り十里も出た町や市へ「汽車ち
うもんを」見物に行つた頃の小作農の人達である。

「横濱のオデオン座で天勝の奇術を見ましたが、實に奇麗でしたね。」

これがテキサス移民婦人會々長夫人の一番誇な日本劇批評だから情けない。

勿論教育は、尋常小學四年の卒業生だから、算術と讀方と書方位しかないのだが、ど
うせ土をいぢるに書物も算盤も無用だ、亞米利加へ來たつて喋るのは英語だから、次第に記憶

を遠ざかつて、手紙の上書だけはどうやら漢字でも中は假名ばかりの金釘と云つた始末。だから
日本に就いての智識は、二昔三昔以前の故郷の村以外に出ないのも無理はない。

斯う云ふ話がある。

ローサンゼルス市場街で代筆業をやつてゐる男の話だが郊外からレタースやトメトを運んで
市場に來る百姓達の中で代書した手紙に屢々切手を同封してやる。その切手が「大日本帝國郵便
切手」と印刷された紫色の十錢だから驚かされる、だが、此の十錢切手は、この代筆業者が一
枚拾仙で賣るのだから結極弗の爲替相場が幾何順調に行つても二十一錢強につく。

「恐らくそんな人の故郷は郵便局なんてない山の中の一軒家の何かでせう。」
と代筆業者は笑つたが、さうかも知れない。

「日本の百姓なら、今では農業雑誌が養鶏の本位は讀んで、農作物の栽培、養豚、養鶏の方法
に改良を加へるでせうが、何しろ日本の文字はろくに讀めない英語は耳から這入つただけで怪し
げ乍ら喋るには喋るが英語の本など讀めないと來てるから何年立つても改良出來ない譯です。
只器械の任事ですから頭を使ふことはないもの、云はば器械の油みいたいものです。」

とは、日本の大學を出てバサデナで温室を経営してゐるKさんの話である。思はぬ處に話が飛んだが、さて、かゝる程度の教養しかない兩親を持つ、彼等第二世は、従つてかゝる程度の『日本』しか知らない譯である。さうして、彼等は中學から大學に進み、立派な亞米利加の學位を持つて社界に出る。最高學府を出た學士は亞米利加文化の代表的であるが日本に關しては『非文明な國』『素足に下駄を穿いて往來し、紙の家に住み、自動車なんか見たこともない野蠻な國民』位より外知らない。

「亞米利加と日本と戦争したら」

「僕は鐵砲を以つて立派に君と戦ふさ。」

と言下に彼等は答へる斯うなると、大和魂だの天孫民族の血の流れなんて誇りは一文にも値しなくなる。日本が祖國なんて彼等の頭には更でない。だが、祖國なき千二百萬の在米黑人が祖先の地、南アフリカに新しく祖國を作ろうと盛に運動したり國なき猶太人が國民的結束を成さんと策謀するに比べて、何んとあきれ果てた彼等ではないか。

B

第二世達は、もう立派に成人して、將に第三世を作らんとする時機である。彼等は盛に結婚を急いでゐる。だがその結婚が容易な業でないのである。

それを話す前に順序として、彼等の結婚を困難にした遠因即ち彼等の兩親の出鱈目な、結婚生活から語らねばならない。

寫眞結婚の悲喜劇、——殆んどその七分が悲劇で終つてゐるが——は今更新らしくない話だが實際日茶苦茶な亂婚であつた。靴屋の主人公が場末の床屋で客の靴を磨いてゐるのだつたり、料理店〇〇樓の樓主が、CHOP、SUEYの血洗ひだつたりしたのは、未だ罪の淺い方で、焼けつくやうな日盛りに汚い麥藁帽を被り、青いエツブロン姿でバラや楓の生垣を大きな鉄でちよん／＼切つて一日三弗にしかならない男が庭園學士であつたり、佛蘭西人經營の洗濯工場で、一日中、熱氣に蒸されてゐる職工が、洗滌學士などと稱したなどは物凄しい。

此處で、その興味深い實例を二ツ三ツ御披露しやう。

横濱を出て十六日の太平洋の船中生活は、船嫌なT子の爲めには死のやうな苦しみであつた。でも、愈々船が金門海峡に這入り、白亜の建物の並んだ小高い島山が見え出すと、いそぐと洗面所に行き、髪を撫でつけたり入念に化粧をするのであつた。移民官の取調べも終り、税關の荷物検査も、無事、O、Kを得た彼女は、憧れの亞米利加の土を踏んだ悦びと、波止場に彼女を迎えて呉れるであらう、あのスポーツな服装をした美しい農學士の夫に初めて顔を合はす豫感に胸を躍らしつ、波止場へと棧橋を夢心地に踏んで行つた。だが、出口の柵に待ち合はせてゐる人々の中には彼女が寫眞で知つた、なつかしい夫の顔は見つからなかつた。

「T子さんですか。ようこそ。船は荒れませんでしたか。」

額の禿け上つた鼻の低い平顔の五十餘りの老人が、河馬のやうな唇から、前齒の金冠を覗かせて卑しく笑ひ乍ら彼女の前に現はれた。

「御迎ひに。どうも有難度う存じます。」

彼女は氣味悪く感じ乍ら、手にしたケースを渡した。男は直ぐ、其處に止められた汚いフォードに彼女を乗せると自ら運轉し始めた。

「遠いんですか。」

「否、この海峡を渡れば直ぐです。」

車は二人を乗せたまゝ、フェリーの渡し場から小蒸汽の甲板に積まれ、やがて對岸につくと二、三哩、オークランドの郊外、茫漠たる平原の中に建てられた一軒家の前に止まつた、牧場の横の粗末な門口には四五人の日本男女が迎へてゐた。

「花嫁さんは疲れてゐるだらうが、直ぐ教會へ行つて貰はう。」

媒酌人らしい四十男が、色の黒いその妻に云つた。何が何やら夢見てゐるやうな彼女は、云はるゝまゝに、用意せられた衣装をつけ、教會に行く自動車に乗せられた、勿論、彼女の胸に盡いた美しい婚君の姿を見ぬばかりか。彼女の横には——恐らく夫の父親であらうと想像した——波止場へ迎へて呉れた禿茶瓶の、老翁がフロック姿で得意氣に座してゐた。

教會に入つて、總てを初めて知つた彼女は、卒倒せんばかりに驚ろいた。河馬の唇を持つたあの父親みたいな老翁と腕を組んで聖壇の前へ進まねばならぬとは。

だが總ては宿命であつた。幾何に掻いても詮ない事であつた。泣き濡れて涙の乾かぬ三月は

過ぎた。若い農學士の美しい寫眞は、彼の友人の息子で加州大學に農科の學生の姿であつた。空想の幻影を現實の幻滅に叩き毀した彼女が、生ける屍を鞭つて求めやうとした努力はやがて報ゆられた。彼女は、山蔭のM市の女學校を出て、殊に學生時代から、英語が得意であつた。で彼女は無理に夫を説得して、裁縫學校に入學する事にした、毎朝オーランドの街へ通ふ彼女は彼女の目的通り、一人の日本人留學生を見つけ出した。夏休暇の労働と稱してその留學生Sが、彼女の家に助力に來た切り秋になつても學校へ行くのではなく、再び春が訪れ二度目の秋風が吹いても、Sは人のい、彼女の夫とセロリーや、キャベージを造り、市場へ運んでゐた。彼女はやがて小供を生んだ。勿論、河馬のやうな唇をした、色の黒いその父に似てもつかぬ、色白の美しい腫をしたSそつくりの面さしの赤ん坊を。六年を経過した。肥つた老夫は、腎臓炎で五六ヶ月床に就いたが、加州名物のウォーターメロンも効なくして、死んで行つた。残された彼女と子供は、二百エーカーの土地の賣上金と八千弗の銀行預金と共にSに連れられて、其地を去つたが、今神戸の山の手通りに、青硝子の立派な齒科醫院を開いてゐるドクトルSの妻君は、空色の腫をした金髪である。

「彼女ですか、ローサンゼルスで、N新聞記者と同棲してゐるさうですよ。子供ですか。肺炎で間なく逝くなりました。」
とSドクトルは答へたさうだ。

話の二

愈々横濱を立つたと云ふ知らせが來ると、老人は吾が事のやうにはしやぎ出した。島へ出るのを止めて妻の止めるのも聞かず三十哩も離れたダラス市へ出掛けて、支那料理店東海樓の料理場へ青年を訪ねた。

「G公、愈々敏子は、二週間目には桑港へ着くんだぜ。迎ひに行つてやらなきあいけねえ。」
すると、當のG公、D老人の興奮に引き替へて、これは亦何んと云ふ落付いた態度だ。

「迎ひつて、親翁さん、俺にあそんな暇はないよ。元々お前が勝手に呼ぶんぢやないか。お前が行つて呉れなきあ困るよ。」

「ウム。それもさうだ。お前だつて稼ぎ人だからな。よし／＼俺が行くよ。だが、お前も早く

アパートを探さんといけねえ。」

そこで親切なD老人船が桑港に着く前の日、愈々迎へ行く事になつた。何しろテキサスから港桑迄はS—P線の特急でも四日は掛る。渡米二十餘年になるが未だ一度だつて曝返へさない長旅である。「だが人の事に何んでそんなに懸命になるの」と、最初から、此の縁談に不賛成をしてゐた妻が、何うした譯か今度の桑港行には大變氣嫌がい。「俺が此處へ來てから生れた娘だから顔は知らないだろうが、何しろ遠いと云つて縁類續きだ」と、D老人、妙に獨り合點して暑い南ノキシコの沙漠の旅の無聊さも考へず、桑港へ出掛けて行つた。「ほう寫眞より肥つて、そうして十八にしちや、大人びてゐるなG公も悦ぶで」などと賞めて、連れ歸つたがダラス市の停車場で迎へてゐる筈の婿のG公の影が見えない。家へ歸ると、十三と九ツになる姉弟の小供達がキモノ姿の花嫁を珍らしげに迎へただけで妻の姿がない。

「マ、は買物。」

と云ふ小供の言葉を信じて直ぐ、自動車をガタツかせてダラス市のG公を訪ねたが、
「一週間前に暇をとつて出て行つたと。」

勘定臺の支那人の主人が笑ひ乍ら答へた。へエー、何處へ行つたつて云ふんだらうと、狐に據まれたやうに、老人は吾が家へ引返したが、妻が未だ歸つてゐない。ひよつとすると、始めて氣がついて、金庫を調べると無い。虎の子の銀行預金帳に株券、衣装戸棚は空開き。

「バ、が行つた晩から、G叔父さんが來て今朝迄宿つてゐたよ。」

と正直な小供の言葉！畜生ッ、唇を震はして叫んだD老人。可愛さうに手放しておい／＼と泣き出した。だが一ヶ月の後には、その惨めな其の日の思出も、けろりと忘れ果てたやうな顔して耕作用のミシンを運轉し乍ら、晴れ渡つた大空に向つて咳いたものだ。

「十三と八ツの小供の母が十八か、ハア……お光（前妻）と俺とは二十五違ひだつたが、それにもう十二、プラスした差だ。どうせ五十歩、百歩さハア……。」

C

加州やボートランド州邊はそれでも日本人が多くて割合に緩和されてゐたらうが、南部諸州殊にテキサス邊では、最初移民して來たのが、男ばかりであつたから、今でもその地方の男達は女

に不足をしてゐる。白人の妻なら十中九迄は淫賣婦の上り、其の他メキシカンか黒人が彼等の妻と相場が極まつてゐる。もつとも土地を持つて相當百姓をやつてゐるのは別として、彼等の多くは、ギヤルベストーンや、ニューオルレアンスなどと云ふ港へ着いた船を脱船し、又はメキシコ領から數日を焼けつく沙漠の苦しい旅をつゞけて密入國した旅券なしの輩だから無理もない。一人の男に内地から若い妻が來たら、當然それは、その附近の飢えた獨身の友達の共同物にならざるを得ない、三十、四十の人妻でも彼等は決して、彼女の夫一人を守らせて置かない。「どうです。あそこに並んでゐる小供達、よく視て御覽なさい。全く顔が違ふでせう。あれで一つ母親の腹から生れた兄弟なんですがね、勿論、父親はあの母親の亭主として今も圓滿に生活してゐますよ。』

とはヒューストンの映畫館で氏が私に話して呉れた珍らしい兄弟である。斯んな話を書いてゐたら幾何でもある。だが、一體私は日系米人二世の話をするんだつたけ。

さて、かゝる性的解放地にかゝる戀愛遊戯者や父母に持った二世の結婚は、一體どんな状態か？

「實際困難しい問題ですよ。親心としては、貞淑な純日本的に教育せられた嫁なり婿を取りたいんですが、なか／＼出來ない事です。日本から來た私達でさへ、いざ嫁をと云つても求められなかつたものです。寫眞結婚で巧く、善良な日本内地の女達を欺いてやつと、求めたのは幸福兒だつたのですからね。移民禁止の今日ではそんな贅澤は夢にも考へられません。まあ此地生れの小供達同志やるより他ありませんね。』

と、両親は投げやりのに云ふ。

「どんな綺麗な奴だつて御免だよ、君脚を見給へ。一體あんなうどんののし棒みたいな脚が世の中に在ると思ふかね。それに無表情で、口ばかり雲雀のやうに達者で、傲慢で生意氣なばかりぢやないか、友達になるんだつて考へものさ。』

と少年達は、云つて居る。

「ヘン。誰があんな不良少年達を相手にしてやるもんか、妾達、男に決して飢えてゐないことよ。ジョン、バリモアだの、ラマン、ノバロフみたいなのでお金をうんと持った男達が私達の媚笑一つで、うよく／＼するほど付いて來るぢやないの、逆上るにも程があるは。』

小女達は、鼻の先で笑つて答へる。

さて、事實はどうか？

亞米利加の學校は先刻御存じの如く、男女共學で、もう中學時代から彼等には友達を持つてゐる友達エコール愛人なる事は言を待たない。黒い眼玉のちんちくりんの二世も人並に、男性の友達を求め、處が少年達の相手となる青い眼のヤンキー娘は、何しろ世界一の吾儘で傲慢きと來てゐるから、餘程の金でも持つていなければ、ふりむきもしない。向ふから手を延ばして來るのなら、變態なラテン民族が好色な獨逸系の血を受けた變り者位なところで、先づ、二世の少年達には、白人の娘を妻にしやうとする念願は達せられないものと思つてい、之れに反して、二世の娘達は、女性の有難さに、白人ボーイ達から、なか／＼もてる、何時だつて白人のボーイ達は色が黒くとも、練馬大根脚だろうと、カムオンと自動車に呼び入れて快遊の相手にする。だが、そいつを有難がつて、さんざん毛むくじやらの腕に抱れ、チーズ臭い唇に中毒する頃になつて「結婚して呉れるか」と切出せば「アイドノー」とさつさと逃けてゆく。結局、白人青年達のい、玩弄である。彼等は黒人の女を玩弄ぶ程度に彼女達を、結婚前の戀愛遊

戯のい、相手とするのである。それに、太平洋沿岸の加州では、白人と日本人の結婚を法律で禁止してゐるから、一層彼等は白人との結婚は至難である。最後は白人の娘に失戀した青年と、白人の男に捨てられた娘とが、同色人種の誼みで、夫婦になるのが落だ。

斯んな一例もある。

ロサンゼルスでもう二十年も住み、今では小さな十仙店を經營して四五萬弗の金を持つてゐると云ふ下老人夫婦の間に出來た一人娘C子は、體格もよく、美しい顔立だったので、中學時代から、白人の學生間に随分ちやほやされてゐた。さて愈々婿をとなつて、彼女の兩親は、親心から日本内地に善良な青年の候補者を求めた。が、専門學校以上の學歷ある者と云ふ希望からして難しい。日本内地だつて、それ程の教育を受けた男が、譬へにも云ふ通り小糠三合より安價な婿などに行く筈がない、求めて五年目に、やつと立派な候補者が發見つた、慈惠醫科大學出身で目下大阪の某病院に勤務中の眉目秀麗な若き醫學士と云ふ觸れ込みである。願つてもない日本一の花婿と仕度料から旅費迄送つて目出度く婚殿來米、華々しく結婚式を挙げたが、更に亞米利加の大學で勉強させたいと、先づワシントン大學に入學手續をしたが駄目、市俄古がい、一

層紐育と運動して見たが、皆不許可と来た。南部あたりの田舎大學でも構はないと、出掛けたが月々の學費は普通の三倍以上も費ふ。よくく調べると、醫學士なんて眞赤な嘘、大阪の場末の齒科醫院で書生をしてゐたと云ふ者だつた。だが皮肉にも娘の腹の中には立派な彼の遺物が残されてゐるし、離婚費用として二千弗も取られ損、結極泣き面に蜂の結果となつて、其れ以來C子は正に三十歳を超へて尙獨身でゐると云ふ。

商科大學出でM物産會社の紐育支店詰の若い社員O君は、親戚關係で加州生れの娘を妻にして、家庭圓滿に紐育に四五年を過したが、東京本店詰で歸朝すると、毎日く妻の爲めに苦しめられた日本文字は愚かなこと、買物に出るにも、通譯が入ると云つた煩はしさ、『お前が一層、鬻髮だつたらそれでいゝが、立派な日本人でこれぢや困る』と、とうく、亞米利加へ歸して仕舞つたと云ふ話もある。

千九百二十四年、移民禁止法案實施以來、在米日本人、日系米人と日本内地人との結婚はダンゼン出来なくなつた。そこで第二世達は嫌でも、彼等同志で家庭を作らねばならない。ところが、従前の移民にも獨身の男が女の數倍も多いのだから、勢ひ女沸抵となつた。

移民禁止のそが爲めに
十八おろか十四五も
四十五十の後家さんも
獨りで居れない時機が来た。

てな、拙劣ではあるが、穿ち得たストン節が唄はれてゐる現在である。

D

大和民族の血を繼いで、ラテン、サクソン民族の教育を受けて成人した彼等第二世は、所謂中性的な畸型人種である。メンデルの遺傳關係を幾何證認しやうと努力しても、最早や彼等は再び、大和魂を持つ忠勇なる日本人とはなり得ない。亞米利加人特有の思ひ上つた自尊心と、傲慢とに、日本人特有の狭量と嫉妬心を交錯した矛盾を持つ彼等は勢ひ性格的破産者でなくてはならない。

判り易く云へば、日本人でありながらアメリカ人である不思議な人種である。

成る程亞米利加の中學、大學で、よく首席をしむる第二世の話がでる。日本人は、よく出来る、頭がい、。なんて日本ビイキの婦人嬌風會幹事なんて鼻眼鏡のお婆さんが賞め、が、そいつは、中學で落第した地主の子と、大學で銀時計を貰つた小作人の倅を例に引いたやうな話に過ぎない。

兎に角第二世の中には不良少年少女が、多い事は見のがす事の出来ない事實である。此處で、不良の典型を一人紹介しやう。

エドワード米井はシャトル市の眼科専門の敷置者、さうです、もう二十幾年、此處で、トラホームの百姓達の眼に硝酸銀をさして暮してゐる生抜きの敷置者の長男に生れた、白熊みたいに肥へた體に、眼の小さい鼻の平たい、シヤムあたりの貴族に近い顔をした青年である。ところが、このシヤムの貴族は見かけだけで性格と來たら野良猫より悪い。學校は中學を出て、南加大學で二年、加州大學で一年と云つた調子で卒業したのかどうか、州立自動車學校だけは卒業したと云ふが之れも怪しい。

だが、自動車の運轉だけは巧みだ。此の男が、シャトル市では、友人の紹介で私の市内見物案

欠

欠

的意識を刺戟した。四十を過ぎて間のない未亡人は遂に彼の執拗な手段に負かされて仕舞つた。如何に彼が獐狂な不良兒である事が察せられるではないか。更に不幸な事には、E未亡人が悔い改めて再び彼の魔の手を脱れた時には既に隠し切れぬ證據、即ち彼女の腹は次第にふくれ出した時であつた。彼女は日本に引揚げねばならなかつたのは當然である。

「實際、これ位痛快な事はなかつたね。それに、Hを犯す前に、もうちやんと、彼女の娘は自動車で連れ出して一人前の女にしてやつてゐたんです。へエ………」

エドワードは斯う云つて鼻をふくりました。彼は、もう三十近いが、今尙獨身で親のすねを嚙つてゐる、困つた男である。

E

さて、この不思議な人種第二世は一體將來どうなる?

在亞米利加日本人間では常に大きな問題として矢笠しく論議されてゐる。

在米十六萬の日本人は、やがて十年の先は二十萬になり百年先には百萬にもならう。

が、果して彼等が白人に伍し堂々と『亞米利加市民』として闊歩するであろうか。或は現在の黒人のやうな運命を辿るではあるまいか——。

などと議論めいても何んの役にも立たない。

何故なら、彼等は亞米利加市民である。

血は同じでも、永遠に太平洋を狭んで吾等と對峙する星條旗下の國民である。

彼等の事を思つたり同情したりする事は、彼等の兩親が日本の國籍に在るほんの短かい將來の期間だけであらう。

情熱いぎりす女



レゼント街のピカデリヤー望む

あの男知つて、お友達、まあそんなに親しいの だがいゝわ、妾、貴方が好きだものね。

構はないわ、知れたらその時のことにすればいゝぢやないの。

男つて、ほんとに小さな友情にこだわるものね。

つゝましいやうで、いざとなると大膽になるのが英吉利女である。

六日間の妻

船が紐育を發して二日目の晩、たつた二人の日本人船客の小川君と私は、娯樂室でトランプをやつて居ると、夫婦連れの亞米利加人から仲間にに入れて呉れと申込まれた。二人限りの同胞で寂しがつてゐた私達は悦んで彼等を迎へた。さうして、それから殆んど毎日毎晩、四人でブリツヂ遊びを續けて、英國のサザンブトンへ着した。

だがその夫婦、ミスター・ローゼンスとミセス・ローゼンスは可笑しな夫婦であつた。ミスター・ローゼンスは、五十を過ぎた老紳士なのに、ミセスは其の孫とも思はれる未だ二十前後の若い婦人で二人の間の會話も至つて、他所よそしく丁寧過ぎてゐた。時々ローゼンスは、競技に熱中して來ると、

「お嬢さん。」

とミセスを呼んだ。そんな時、ユーモリストの小川君はそれに例つて、

「お嬢さん。」

と、呼んで皆を笑せた。船が港に着いて直ぐ、波止場から出る倫敦行の急行列車に乗らうと、駆けつけたが、税關で少し暇をとつた爲めもう何の列車も満員である。途方に暮れて、プラットホームにほんやり立つてゐると、肩を叩く者がある。見るとローゼンス老人である。

「貴方達の席も準備して置きましたから一緒にいらつしやい。」

と親切に云つて呉れる。そこで二人は喜んで老人と一緒にその列車に乗つた。と、同時に汽車は發車した。

「いや、貴方のお蔭で助かりました。」

と席に着いた。見ると、其處に當然乗つてゐる筈のミセスが見えない。

「奥様は」

と問ふと、

「あれは、此處で降りました。」

と平然と答へる。

「どうしたのです。」

「何、あれは船の中だけの妻ですよ。」
老紳士は少してれ乍ら笑つた。

「船の中だけの妻、一體どうしたのです。差向へなかつたら、もう少し詳しく話して頂けないでせうか。」

「馬鹿々々しい話ですが。——」

老紳士は、年甲斐もない艶話をする事が、少し気が咎めたらしく躊躇したが、直ぐ亞米利加人らしく快活になつて、語つた處は斯うである。

ローゼンス老人は、紐育で毛皮商をやつてゐるのだが、今度取引の爲めに倫敦へ行つた序でに瑞西へ避暑に行かうと、紐育のトマスタック會社へ切符を買ひに行つた。其時居合せたのがあのミセス、本當はヘレンといふあの娘で、彼女は米國の伯母の病氣を見舞に行つて歸る處であつた。が、貧乏な彼女は、特三等の切符を買ひかけたのを、ローゼンス老人が、變な俠氣を出して一等切符代を出し、否其處が愆な亞米利加人の事だから勿論全部でなく、その不足料金を支拂つて、一緒に船に乗つたのだと云ふ。

「何故一緒に瑞西に行かないのです。」
と問ふと、

「あの娘の云ふのには、間もなく許嫁と結婚するんださうです。」
と、残り惜しさに云つた。

「ぢやあの娘さん、いゝ奥様振りで、密月旅行の練習をやつた譯ですね。」

「さう思やあい、功德ですが、英國の娘はなか／＼多情ですからね。」

老紳士は愉快さうに腹の底から笑つた。

ピカデリー夜話

プラタンの葉蔭にしよんほり灯る瓦斯燈、人通りの少い丁度新派芝居の書割みみたいな暗い寂しい露路を幾曲り、バット明るい廣小路に出た。其處は活動館と寄席と酒場とカフェーと、イルミネーションと酒と烟草と、ジャズと喧騒と、それに酔ふ人の波の交錯、倫敦の淺草とも稱すべき歡樂郷ピカデリーサーカスである。

夜はもう十時を過ぎるに、夕闇は尙、行き交ふ乗合自動車の腹の赤い廣告文字さへ残す明るさである。山高帽、手に白い手袋とステッキ、上衣のボタンをきちんと止めて、尖った靴のエナメルを光らかして行く紳士の生粋の倫敦兒を氣取つたスタイルが眼につく。しかしそれよりも、淑女のやうに着飾つた、頬を赤くした若い女のさても多いことよ。

「十時を過ぎて街路を歩いてゐるやうな女はろくな奴ではない」と倫敦人は云つてゐるが、之れほど多くの女かと驚かされる。しかし彼女等は決して街角や、ビルディングのほの暗い軒下に佇んでゐて物欲しさうにしてゐるのではなく、如何にも用ありけに、歩道の石をクワツク〜と大股に歩いて行く。さうして、必ず二人三人と連れ立つて、愉快さうに笑ひ乍ら行くのである。だが、すれ違ふ度に、その瞳と唇のあたりにコケテツシユな微笑を送ることを忘れずに行く。中には「KON'BANWA」とか「IKAGADESU」と巧な日本語で私達に呼びかけるのである。断つて置くが私達とは私と小川君の二人である。

「話には聞いてゐるだが、實際澤山ゐるね、それに下手乍らでも日本語とはうれしいね。」

小川君は、ポストンの大學に二年ゐてさんざん、傲慢で吾儘なヤンキーガールに不快を感じたと

云ふだけあつて、眞實愉快を感じたらしい。

「しかし、流石は禮讓の國だけあつて、僕達をどこ迄も露骨に誘惑しやうと云ふものもないらしいね。」

「だつて、僕達が臆病だからさ。」

それもさうだ、實際私達は、たつた數時間前 倫敦に來たばかりの赤毛布である。様子の不明さに對して一種の恐怖が、私達のどこからか陰さしてゐるのが見えるかも知れない。

「今夜は、まあ、ピカデリー見學に止めるかな。」

そこで二人は、Pホテルの横の小さいカフェーに這入つて行つた。客はほんの二三組で澤山に椅子が空いてゐた。私達は窓側に、眞赤なカーネーションの鉢を置いた下のテーブルに着いて、コーヒエを注文した。すると、私達の後から二人づれの若い女が這入つて來て、丁度私達の隣のテーブルに座した。その時小川君の置いた帽子が彼女達の一つの椅子にあつたのを、背の高い年増らしいのが、そつと、それをとると。

「GOMENNASAI」

と明瞭な日本語で云ひ乍ら、空いた椅子の上に置いた。

「サンキュウ、サンキュウ。」

小川君は、一寸てれた顔をしながら云つた。さうして私に腫で「来たぞ」と合圖した。それと同時に、

「失禮ですが、貴方がた、亞米利加から来たのでせう。」

ゆつくりした英語だ、優しい丁寧な言葉だ。

「よく見ましたね、僕達今日倫敦に來たばかりですよ。」

よせばいいのに、小川君正直に答へてしまつた。

「ホ………。妾達は千里眼でせう。」

「一目で亞米利加から來た方と云ふことが知れてよ。」

丸顔の今一人の方も口を添へた。

「どうしてだらう。」

私も初めて驚ろいた顔を態と誇張して云つた。

「ヤンキー型の服、ヤンキー型の帽子」
「ハア………」

小川君も私も思はず、その簡単な謎の種明しに大きく笑つた。彼女達もむろん一緒に明るく笑つた。コーヒーが來た。彼女達のテーブルへは葡萄酒らしいグラスが運ばれた。私達は腫を見合はして今更野暮臭いコーヒーを注文したことを悔いた。

「日本紳士方。BANZAI」

彼女達は、グラスを相互にカチリと合せて、につことした。プロゼットと云はずに、態と萬歳と日本語に云つたところに、二人は又すつかり氣持をよくした。そこで私達も葡萄酒を注文した。彼女達は、私達のテーブルに來てもいい、かと問ふた。「どうぞ」と答へると二人は別々になつて私達の間に一人宛座した。更に新しく酒が注文された。さうして、

「どうです、妾の家に行きませんか。」

と迄に話が進んで行つた。だが私達は明朝大使館の人に、市中の案内を頼んでゐて、その人が朝の六時にホテルに來る約束をしてゐるので、その理由を云つて斷つた。

「ぢや、短時間でも。」

と彼女達は夫々腕を私達の肩にかけて、しきりと口説いた。山羊のやうな甘い彼女達の肌の匂ひが、長い船と汽車に揺られて来た私達の情心をそよつた。

少し露骨のやうであつたが、亞米利加式に私は小さい聲で彼女の耳に私語いた。「ハウマッチ」しかし、彼女は別に氣にせぬらしく云つた。

「一傍」

だが私達は、それをどうしやうと云ふのではなかつた。今夜は見學と云ふことにして引上げやう、そこで、勸定を支拂つて追ひすがるやうにして哀願乍ら出て来た彼女達をふり切ると、其處に並んでゐた一つのタキシールに乗つた。車の窓によりかゝつて尙しきりと口説いた彼女達は、

「明晩十時このカフェーで必らず逢いましやう。」

と窓から手を差入れて、握手をすると、

「SAYONARA」

と悲しい表情をした。

車が動き初めると

「しかし、少し心の底に惜しいやうな氣がするね。」

小川君。

「機會は幾何もあるだらうが、愉快だつたね。」

「日本人は随分もてゝゐると見えるね。」

「さうだ、何にしても亞米利加と大違ひさ。」

「大きにさうだよ。」

ホテルに着いた時はもう十二時を過ぎてゐた。

壁に掛けた扇

夕空の明りに浮ぶ英傑ネルソンの颯爽たる姿を右に、賑かな灯のトラファール、スクエヤーを過ぎた私達の自動車はチームス河畔を一さんに走り、やがてとある横町の辻に止まつた。女は手提げから金を出して運轉手に渡した。それは餘程料金より多かつたと見えて、

「有難度う御座居ました、奥様、御氣嫌やう」

と丁寧な言葉で帽子をとつた。二三間行つた黒い古びた建物の扉の前に立つた女は、手提から錠を出すと、ガチャ／＼と音さして開けた。中は眞暗だ。

「静かに」

と低い聲で云つて、手さぐりで壁の下部に置かれたマッチを取ると、チツと燭して持つた蠟燭に點じた、絨氈の上を音なく三階に上る。室へ這入ると、卓の上の舊式な青い臺洋燈に灯を點する。なんと云ふ雑然とした冷い室だ。置かれた器具のなんのと骨董染みてゐることよ。さうして黄ろい洋燈の光りに浮び出た、薄水色の舞踏服の美しい女の姿のさても、矛盾した對照である事よ。裏切られた酔のやうな感じが私の心を暗くした。さうして力なく其處の長椅子に腰をおろした。

「どう、コーヒーは欲しくない。」

女は舞踏靴を脱ぎ乍ら、私をふり返つた。

「おいしいコーヒーがあるのよ。」

「頂戴しやう」

私は見るとはなく、草色紙を張られた壁に眼をやつた。其處には、此の室に如何にもふさはしい、一本の扇が開けて掛けてあつた。なつかしさに、立ち立つてよく見ると、達筆な鸞堂流で「大川大人の金婚式を祝ひて」として歌一首、從二位侯爵〇〇〇臣とある。大川、大川、私は二三度、口の内で呟いて、思ひ當ると思はず手を打つて苦笑した。

「綺麗でせう。」

女は、コーヒーわかしを瓦斯火爐の上に置き乍ら云つた。

「之れは、大川と云ふ人から直接貰つたの。」

「エ、あの老紳士は、親切な人でした。日本から澤山に珍らしい品を送つて呉れるのよ。今

でも、クリスマスには何時もカードを呉れます。」

彼女は、小さな黒塗りの手箱を戸棚から出すと、その中から澤山の繪はがきや浮世繪を出した。赤い表紙の寫眞帖には澤山の日本の紳士の寫眞が張りつめられてゐた。それは今日本の政界や實業界で有名な人達の顔も見えた。やがて彼女は、立派な金沙の着物を舞踏服に着代へたが、背の高い彼女にはそれが、短かくて、手も足も露はに出てゐる爲め、少しも似合ふとは見得なかつ

た。

「君は日本へ行きたくはないか。」

「妾、櫻を見たい、然し、長い旅をする事が嫌。」

「どうして日本人を好くのかね。」

「日本の紳士は、皆親切だから。」

やがてコーヒの養える音がし始めた。彼女は、その似合ぬ日本服の腰をかめて、コーヒをわかしを探ると静かに二つの茶碗を卓の上に置いた。

ハイドパークの妖婦

「で諸君、私の此の意見に對して不同意ならば散つて下さい。」

櫓の上でアセチリン瓦斯の青い灯に反射した頭を嚴めしく振り立て、紳士は大見得を切つた。バチ／＼と群衆は拍手した。その群衆を他所に、青赤の帽子が織るが如く往來してゐる。向ふの噴水の影、此方の木の下、或は銅像や、石門の間には、さうした女が男と私語々々と語つて

ゐる。曠原の向ふの道では、二三十人の水兵と女達がきやつきやつと、騒いでゐる。これが世界に名高いハイドパークの夜景である。

「もし／＼、一寸。」

少し暗いなと思ふ處を行くと、すぐ後から呼びかける。足を止めると直ぐ寄り添つて来て、

「散歩は如何。」

と、柔かいその手で蛇のやうに腕を巻きつく。廣い芝草の露を踏み乍ら、次第に群衆と遠ざかつて行く。

「妾未だ今夜一杯も飲まないは、キューラソーが一杯欲しいはね。」

謎をかけて来たのを、とほけて、

「キューラソー一杯、一志もあつたら飲めるぢやないか。」

言葉の終らぬ内に、

「エ、一杯でい、は。」

と来た。一志か、此奴は安い。安過ぎる。だが待てよ、安物錢失ひと云ふことがあるからな。

「君の家は近いかい。」

「い、え遠いは。だつて家へ行かなくてもいい、ぢやないの。」

「ぢやホテルかえ。」

「ホテル、貴方がよかつたら行つてもいいけど。そんな無駄な金を使わなくてもいいのよ。」

「ぢや何處へ行くんだ。」

「どう、あの叢は。」

糞つ此の獸奴、俺は之れでも日本の紳士だぞ。

「さあ、手を御出し、一志上げやう、散歩賃にね。」

「あら怒つたの、」

女のすがるのを振り切つて、一散に駈け出した。胸が悪くて仕方がない。

「オーイ、タキシード、俺を、一番うまい酒を飲ます料理店に連れて行つて呉れつ。」

カフェエーマキシム

ボートランド街のオックス街に突當つた處に青赤のイルミネーションを輝したカフェエーマキシムはコスモポリタンな否、寧ろ東洋色の一番濃厚な酒場である。色硝石の軒燈に「酒樓」と支那風に書かれ赤い柱が目立つインディアン風な派手な服装をつけて美くしい小女を抱ひて岩角に大見得を切つてゐる………。ダグラスのベンキの看板を揚けた活動館の隣りの赤い扉を押して這入ると、廣い階段を降りる地下室である。入口に十四五の美少年が、帽子や、杖を預かつて、どうぞと案内する。廣いサロンの中央を丸く切り抜いて、更に階下に舞踏場を設け、圍まれた朱欄の金具が裝飾電氣の光にキラ／＼と輝いてゐる。正面の一段高い處にジャズバンドが設けられ、絶えずアメリカ式のサクソフオンや、トローポーの明るい音が響いて居る。イブニングを着けた給仕が席に着くと椅子を進める。どの椅子も客で一杯である。客と云つても殆んど淑女のやうに舞踏服を着けた美しい女である。その女に圍まれて、黄色の東洋人——支那人、安南人、印度人、一番多いのが、髻を貯へた小男の日本紳士である。

卓上の料理表には漢字と英語の二種に書いた支那料理品の名が、ずらりと並んでゐる。だが、どの卓でも、盃ばかり並んで、皿らしい物の影を見ない。席に着いた私達三人は、階下の舞踏を見るより先づ、近所の卓の女達からの秋波を鑑賞した。向ふ側の卓からは盛んに媚笑を送る。指で頬をついて次に卓をつつく——妾の卓へ来ないかとの電話である。怪しくも淫らなジャズの曲につれて、黒光る顔をした印度人や、青ぶくれた暮みたいな支那人、さては、脚の短い日本人の男と踊つてゐる。金髪、紅頬、青黛、紫翠の耳環り、或は白金の腕輪、眞珠の耳飾りが、踊り乍ら上に向つて投げる媚笑、嬌笑、投げキッス………踊り好きなTは、隣り卓の丈の高い露西亞女らしいのと何時の間にか階下に降りて、足軽くと云ひたいが、中氣病みのすて、こ踊りに近い足どりで、チャールストンを踏んでゐる。Dは、便所に行くと云つた切り歸つて来ない。踊る相手を持たず、ウキスキの盃を管めてゐると、

「コンバンワ」と、

云ふ聲、

「グッドイブニング」

と周章へて頭を上けると。

「ミスターコシヤダが逢ひたいと云つて居ます。妾と一緒に来て下さい。」

と美しい顔が笑ふ、亞米利加女優のボーラー、ネグリーそつくりな、あきれた様な大きい眼をした女だ。

「何處に居る。」

「彼方の角、ほら、青い帽子の影に見えるでせう。」

會社の越田氏の眼鏡を掛けた、にきび顔が見える。一緒に連れ立つて行くと、

「やあ、やつて来たね。一人で遠征して来るなんて怪しいですな。」

越田氏は、宴會か何かの歸りらしく大分酩酊してゐる。其處に居た二人の日本紳士を紹介される。實業家のE氏、畫家のH氏、それに四人の女達が、取巻いて雀のやうに喋つてゐる。

「まあ一杯、この娘はどうです。可愛いでせう。」

盃を、私に差すと、未だ立つてゐる英國製ボーラネグリーの手をとつて越田氏は自分の膝へ、赤ん坊を抱く様に乗せたが、小さい越田氏の膝から大きな臀部が半分も喰み出してゐる。

「此奴はね、之れで元はソプラノの唱手で一時ピカデリーの寄席では相當人氣者でしたがね、水銀を呑まされてから此處へ来る女になつたんですよと云ふK男爵の息子知つてゐるでせう。有名な遊蕩兒ですがね、あの小男爵の小供迄生んださうですが、女優とか、寄席藝人と云ふ者は東西變りはありませんね。」

越田氏は、女の首のまほりを撫でるやうにして愉快けに云ふ。其處へTが踊つた女と一緒にやつて来た。

「どうだ、一緒に日本の唄をやらうか。」

越田氏の命令で五人の女達は唄ひ出した。

「もし〜〜總さんよ……………」

「うまい〜。其處で今度はストンストンか。」

變んなアクセントでストン節をやり出した。

「此處の女は世界中で一番高價ですよ。先輩が悪いですな、一晚三十ギニ四十ギニなんてペラ棒な値があるもんですか、どうも日本の貴族や金持ばかりを見てゐるのだから、自然此奴等の鼻

息が荒くなるんですね。」

ジャズは愈々賑かに、人々は次第に興奮して、さうして踊る。跳る。酒だ、唄だ。

英國製杖娘

宿つて五日目は丁度土曜日。

物産のM君の来るのを待つ私は、通りに面した窓から黄暮れ行く裏街通りの風景をほんやり見ると、コツ〜扉をノックして這入つて来たは、掃除女の婆さん、頭にセピア色の眞綿で出来た鬘をつけた狐のやうに口を尖らせた六十四五の婆。喉の奥で咳くやうに、氣味の悪い皺枯れ聲で朝夕二回訪れて来ては、

「室は如何です。萬事整頓」

と自問自答する妖婆だ。その都度干乾びた目刺しみたいな手を出すので、五片位せしめられる。やりたくないが、この萬事整頓の裏のやうなぶつ〜聲を聞くと、とても氣味が悪くて出さない譯に行かなくなる。

で、あ、又、あのエブリシングかと私は顔をしかめる。すると婆さん、窓側に寄つて来て、

「旦那、御覽なさいよ、そのあの屋根裏を。」

指さす方を見ると筋向ひの建物の七階の屋根裏、うす暗い窓側で四つ五つの女の頭、だが窓が高くてうつむいた髪の色や、褐色なのが見えるばかりである。

「裁縫所ですがね、土着のみな若い綺麗な娘ですよ。市内見物の案内をさせませうか、十志も出して頂いたら一日中お伴しますよ。」

婆は、緩んだ入歯をがくぐく云はせ乍ら、にやつとした。

「明日は日曜、一つ、その娘さんの案内を頼もうか。」

私は、氣さくに斯う云つて、婆の掌へ、一志銀貨を十個と更に一枚を加へてのせた。

「オー、ライ。明日、八時に、向ふのポストの脇へ待たせて置きます。エブリシングオールラ

イ。

婆は、満足さうに出て行つた。

翌朝。

私は昨夜ゲーテ座の「ヴガボンドキング」を見て歸りにピカデリーを漫歩して夜中の二時に歸つて来たので、朝起きると鬚を剃るのと、牛乳とソーセージを喰べると一緒にやると云つた、周章へ方で、やつと約束の八時、ホテルの階段を降りて。——こゝで斷つて置くが私のホテルは、オックスフォード街がレセント街と交又する反対側のP街と云ふ寂しい露路のPと云ふ第三流の古い建物で、昇降車もあるんだが、年中「修繕中」の札のぶらさがつて居ると云ふ。でも、半世紀も前に架設したまゝのカーボン線の電球乍ら、せめて、蠟燭や洋燈でないのが、仕合せと思はねばならないと云つた、クラシクな匂ひに富んだホテルなのである——やつと、向ひの烟草屋の前の赤いポストの脇に立つてゐる。黒い帽子に、黒い着物を着けた修道女學校の學生みたいな恰好の彼女、即ち、婆の世話して呉れた、私の案内娘さんに逢つた。

腫のくるくした丸ほちやな、愛蘭土邊の百姓の娘さんと云つた無邪氣な顔した十八九の少女、「黄ろい顔の東洋人」と、でも婆が云つたと見えて、直ぐ言葉を掛けた。

「ハロー。」

「ハロー、御氣嫌さん。」

「有難たう。」

「今日は御苦勞様で。」

「何處へ案内いたしませう。」

「さあ」

「倫敦塔。ウエストミンスター寺院」

「皆、見ました。」

「では、公園？ 晴れてるますね。レゼントへ行きませんか。綺麗な花が澤山咲いてるます。」

そして日本の植物も澤山ありますよ。」

そこで私達は、オックスフォードの大通りへ出て、バスの二階に上ると、晴れた大倫敦の空をほしいま、にながめ乍ら、瓦斯燈の並んだ狭い露路通りを幾曲りか揺られて行つた。

「ねえ、ゲッテーさん、綺麗ですね。」

「美しい花ね。」

一時間前にはあんな、他所行きの敬語で以つて會話した二人は思はれぬ程打とけた。私達は腕

を組み乍ら、咲き亂れた薔薇のトンネルを歩いて行つた。松、檜、紅葉、銀杏と、それには一つく丁寧に「JAPAN」と札をつけた広い園内の立木を探し歩いたり、大きな圓形の硝子屋根の温室を見たり、青く澄んだ池の邊の芝草の上に腰をおろして、彼女の暗誦してゐるバイロンの詩に感心したり、サンドウキツチを喰べたり等等、愉快な日を暮してやがて私達は、チャーリングクロス街の料理店で夕食を喰べ、其處の映畫館「アストリア」で、亞米利加物の「港の女」で、リ、アン嬢のフラツパー振りに感心したりして、結極更に彼女の手に一ポンドの札を握らせた上夜更け歸りの途中自動車の中で口笛を鳴らした私であつた。

だが、翌朝、迎ひに来て呉れたI君の自動車で、デンマーク街のTホテルに引越して行つた私は、動き出す自動車の窓に帽子を振つて、屋根裏の窓から投げる彼女の最後の接吻に果ない答禮をしたに過ぎなかつた。

空を見て歩け

空を見を歩

静かな午過ぎの陽が塔上にくるめいてゐる。バツキングム宮殿の前である。頑丈で殿めしい鐵

の高堀の外側を真赤な、服に、黒い毛の高帽を眼深く冠つた近衛兵が、威勢よく掛聲をして五六間置きに一定の速度で巡回し乍ら警戒してゐる。皇帝の出御と見えて、正門の前では兵士や警官の帽子や銃剣が、チラ／＼と閃いてゐた。両側に澤山の男女が並んで、それを待つてゐる。だが何んと云ふ崇高さに乏しいことだらう。

「丸の内の宮城前に行く感じと、此處を歩いてゐる氣持ちと、まるで違つてゐるね。」
私は同行の小川君に云つた。

「總てが、餘りバツとして明る過ぎるからだらう。それに僕達は日本人だからね。」

なるほど、私達は、異國人だ。自分の國の皇居と他國の宮殿と同じ心で見ると譯がない、然し、さうしたハンデイヤップを除いて考へても、あの青々と澄んだ御塚の彼方に築かれた石垣、鬱蒼たる老松の奥にひそまるる吾が丸の内の神々しい感じと、此の眞晝の太陽に露け出されて白けた鐵塚、それから四五十間の奥に建てられた宮殿の窓や入口を眺める氣持ちは、何んと、大きな差異のあることよ。

だが、それよりも、其の曠原の芝草に牛の午寢のやうに轉がつてゐる幾組の、いや其へたら

數十組であらうが、山高帽と、赤いスカートは一體どうしたとか、之れが一體、世界で一番禮儀の國と云はれる大英國の王宮の前の眞晝の光景である。草の上に戀を私語してゐる男女よ、今君達の皇帝は、あの鐵門を出やうとしてゐるではないか。それを他所に君達は、而かも、白日の下で何たる醜態を露け出してゐる事であらう。

「君、見てはいけない。あれを熱視する者は紳士としての人格を失ふものだとしてあるさうだ。」

と小川君が注意して呉れた。なるほど其處に行く人は誰もそれを見ようとしなない。銀色の光つたヘルメットを冠つて、堂々と行く警官さへ、知らぬ顔で行き過ぎる。

「だつて君、前を見ても後を見ても、左も右も、全く之れぢや歩かれんと云ふ譯になるね。」

「さうだ。空を見て歩くんだね。空を、誰かの詩のやうに青空を見てゐると、すべての誘惑から脱れ得られる。全く大きな哲理だ。」

「だが、うっかり空ばかり見て歩くと、新婚旅行の飛行機に惱される時代が来るかも知れないね。」

私達は笑ひ乍ら、此の曠原を急ぎ足で通り越した。

妙 な 署 名

キユウ公園の芝原で小供の拳闘遊びを寫眞器に撮つてみると、

「貴方、妾にも撮つて下さらない。」

と、来た。公園の晝稼ぎと見える。見すく晝出たお月様と思ひ乍らも、向ふが名乗らぬ以上お前は淫賣だから嫌だと断はれない、どうせ撮つたら日本の土産だと思つたから、

「オーライ」

とキヤメラを向ける。首を曲げて、にこつと笑つた表情、これちやネガラブの上では、立派な淑女に現はれるかも知れない。

「有難度う。出来たら一枚下さるでせう、貴方は親切だから。」

と側へ寄つて来た。貴方は親切だからは餘計だ。だが、寫眞に對しては日本も英國も人情に變りはない。どんな人間でも、寫さして呉れたら必らず一枚呉れるやうに云ふ。理屈に合つたやうな

願ひだが撮つた方ではたいい撮り放なしが多い。——私もよく日本の旅行先でそいつをやつたものだが。そこで私も、何時もの手で其場限りの氣安めに、
「あ、い、とも、送つてあげるよ。」
と、其辭、くすりと腹で笑つた。さうして、新しいフィルムを取替ふ可く側のベンチに腰をおろした。彼女も勿論、次いで腰をかけた。

「貴方は旅行者ね。佛蘭西から、それとも亞米利加から。」
そろく仕事にかゝつて来た。一つからかつて見るかな。

「亞米利加から。」

「さう。長く彼地にゐましたか。」

少しくどくなつて来た。此奴餘程新米だな。

「三ヶ年」

少し出鱈目を云つてやつた。

「亞米利加と此國とはどつちが御好き。」

「勿論、此國だね。」

「好きなら、長く倫敦で止まるでせうね。」

「勿論」

多愛もない問答だ。

「今日貴方御暇だつたら、妾の家へ遊びに行かない。妾の家は綺麗ですよ。日本のキモノを妾持つてゐますよ。人形もハゴイタもね。」

「有難たう。今日は未だ僕は暇を持ちません大變氣の毒ですが。」

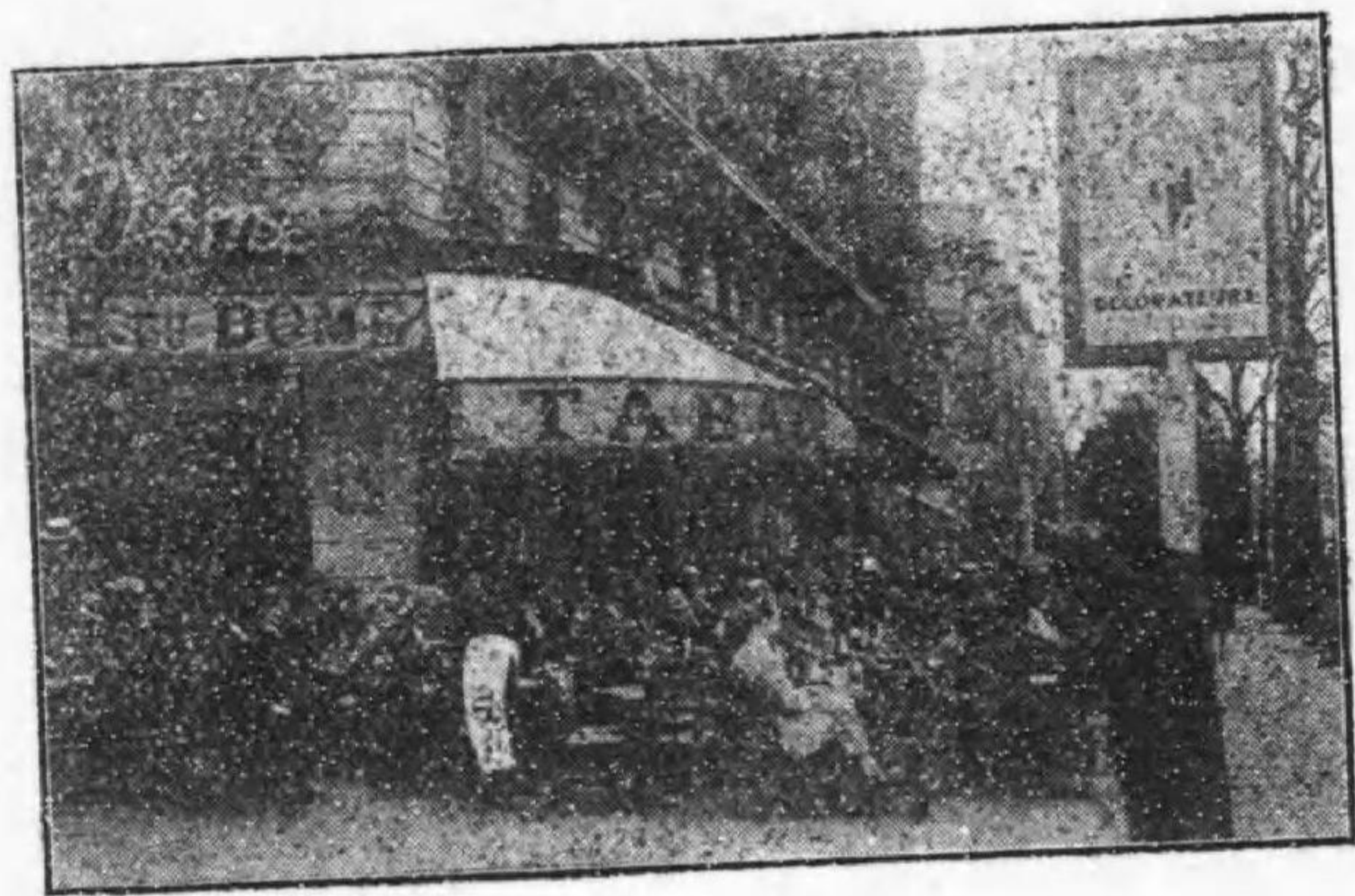
「さう、ちや此の次にね。しかし御願だから、此のブックに署名して下さらない。」

女は手提から小さな皮表紙の手帖を取り出して差出した。は、あ、寫眞の請求のために住所を書いて呉れと云ふのだな。擴げて見ると、これは亦どうしたと云ふ事か、其の手帖一杯に、日本人の署名がしてあるではないか。男爵某、公爵某、畫伯某、何會社重役某、中には漫畫の似顔もある。日本字で詩を書いたもの、俳句様のものもある。然しどうも、皆出鱈目な名を書いてゐる。

欠

女すんらふ媚妖

女すんらふ媚妖



— エフカの里巴

お脱ぎなさいよ。
そのワイシャツもさ……
おや 貴方、髭があるのね。
かうなると
髭はほんたうに邪魔ね。
刺つてお舞ひなさいよ。
と 佛蘭西女である

欠